

近世ドイツの口頭伝承とレッシング

——『ローガウ寓意詩集』から『賢者ナータン』へ——

吉 田 孝 夫

コヘレトは知恵を深めるにつれて、より良く民を教え、知識を与えた。多くの格言を吟味し、研究し、編集した。コヘレトは望ましい語句を探し求め、真理の言葉を忠実に記録しようとした。¹

「コヘレトの言葉」12.9—10

文字は殺しますが、霊は生かします。

「コリントの信徒への手紙」二、3.6

1

寓意詩^{エピグラム}というジャンルが、寓話^{フアーベル}と相ならび、18世紀ドイツ啓蒙主義期に一つの隆盛の時をむかえ、特に民衆啓蒙の観点から重要な役割を担っていたということ、この点はあらためて強調するまでもないだろう。教訓性、知的遊戯性、諷刺性といった要素をもつこの形式は、ゴットホルト・エフライム・レッシング(1729-1781)というドイツ啓蒙主義の代表的存在をして、生涯その創作に向かわせることになった。²

その彼が、1759年、友人ラムラーとともに一人の寓意詩人の作品集を編んで出版している。前世紀の神聖ローマ帝国東部、シュレージエンに生きた地方貴族フリードリヒ・フォン・ローガウ(1604-1655)の寓意詩集である。ある資料によれば、レッシングはローガウの寓意詩集を毎日ひもとき、その1654年刊の書物を後生大切にしていたという³。もともとはラムラーが言い出した、ドイツの寓意詩全体を俯瞰するアンソロジーを作る予定があったようで、いわばその作業の中間産物としてこの近世詩人をめぐる書物が産みおとされた。結局、最終目的のほうは実現されなかったのだが⁴、レッシングとラムラーによって編まれたこの作品集は、ローガウという近世ドイツの詩人を、近代へとかわらうじて伝える稀有の媒介者となる。後にローガウのある寓意詩から発想を得たケラーが

一つの小説を書くことになるのも、この18世紀啓蒙主義者の仕事によってである。⁵

しかしそれは実際のところ、極めて数少ない近代ローガウ受容の一例にすぎない。大局的には、やがてローガウという詩人も、その膨大な寓意詩も、また寓意詩というジャンルそのものも、近代の展開のなかで周辺に追いやられていく。

とはいえ、レッシングがああ18世紀中葉というドイツ文学の重要な転機において、あえて前世紀のローガウを蘇らせた事実には、ある重要な意味を見て取ることができると思われる。それは端的に言うなら、ドイツの文学言語、すなわち、文字言語としての詩的言語が確立されていくなかで、近世17世紀の寓意詩がもつ一つの表現特性を有効に関与させたのではないかということだ。ローガウの寓意詩は、たしかに書物として印刷された文字言語の姿をとってはいるものの、その個々の詩の少なからぬ源泉は、ドイツの口頭伝承、すなわち民衆の格言であった。レッシングは、いわゆるこの口承言語がもちうる可能性を知り、やがてそれを彼自身が展開してゆくドイツ戯曲の新しい文体に生かすことができた。そしてもしかすると、ゲーテ時代に一つの完成に至るドイツの詩的言語にとっても、不可欠の里程碑を据えることができたときえ言えるのかもしれない。本論は、近代ドイツの文字言語のなかに流しこまれる近世的口承言語の行方を、ローガウとレッシング／ラムラーの資料をもとにたどるものである。

2

彼自身、寓意詩の優れた実作者であるレッシングにとって、しかし最高の模範だったのはローガウでなかった。古代ローマのマルティアーリスである。鋭い機智と落ち(Pointe)を利かせ、意味の知的反転に貫かれたマルティアーリスの作風は、レッシング自身の寓意詩にも深く反映している。それに比べてローガウの作品には、ドイツ土着の格言やことわざがもつ実直な響きが濃厚に漂い、鋭敏なる啓蒙主義者には、十分な知的満足を与えることができなかったようだ。このことは、レッシングが自身の寓意詩観を述べた、『エピグラムならびに主要なエピグラム作者に関する諸事註解』(1771年)に示されている。

周知のように、レッシングの死後、彼の寓意詩論に対して一つの批判的補完

がなされる。ヘルダー(1744-1803)による『ギリシアのエピグラムに関する註解』(1785/86年)である。古代ローマのマルティアリスではなく、さらに時代を遡った古代ギリシアの『ギリシア詞華集』を範とするヘルダーは、レッシングの機智的(scharfsinnig)寓意詩に対する金言的(gnomisch)寓意詩という、人生感情の素朴な表現に重きを置いたもう一つのタイプを提示する。以後、現代に至る寓意詩研究の領域においてもこの二分法が広く認められていくわけだが、興味深いことには、古典古代に理想形を求めるレッシングとヘルダーの両者ともに、よき寓意詩の条件として、素材のありありとした(gegenwärtig)具体性を求める点では一致している。そしてこの点で、ローガウは不十分さを残すと両者から批判を受けているのである。⁷

しかしそれでも、レッシングとヘルダーが、ローガウの独特な寓意詩の世界を何らかの意味で高く評価していたことに変わりはない。みずみずしい古典古代の文学的理想像から逸脱してしまう、いわば鈍重なドイツ的格言に満ちあふれたローガウ詩。ヘルダーはさしあたり脇に置くとして、それではなぜレッシングは、実作上ではさして模範と見なしているわけでもない近世作家の作品を、友人とともにあえて編集刊行するべく踏み切ったのだろうか。

先に言及したドイツ・エピグラム集完成の希望だけでなく、レッシングには、もう一つ実現しなかった夢があった。それはドイツ語圏全域に通用する普遍的ドイツ語辞典を作成することである。折りしも同時代には、フリッシュの独羅辞典(1741年)に始まり、とりわけアーデルングのドイツ語辞典(1774-1786年)に代表される、統一的規範言語の確定への動きが進行していた。そしてレッシングは、いわばこの時代潮流に対する彼なりの反応として、ローガウという一世紀前の過去の詩人に関わったのである。はたしてレッシングは、この『フリードリヒ・フォン・ローガウ寓意詩集』(以下『ローガウ集』)の付録として『辞書』(以下『ローガウ辞書』)という、一種の語彙集のようなものを付属させている。レッシングは、この他にも辞書作成の準備的作業と見なせる原稿をいくつか残しているが、そのなかで『ローガウ辞書』は、一定の完成度に達して同時代に公表されえた唯一の資料である。

過去の詩人の業績を顧みるという観点においては、同時代のもう一つの流れ、例えばゴットシエットによる『ライネケ狐』(1752年)や、スイス派の人びとによるミンネザング(1758/59年)と『ニーベルンゲンの歌』の刊行(1757年)のよう

な、中世文学の発掘作業が行われた事実を忘れてはならない。当然レッシングにはそのことが意識されており、『ニーベルンゲンの歌』の重要性を痛感する彼は、スイス派の仕事に対していくつかの誤りを指摘しつつ、自らこの作品についての注釈的著作（ただし断片）を残している。この『ニーベルンゲンの歌』を中心とする自国の過去の文学の研究作業を経て、ほぼその直後にレッシング／ラムラーの『ローガウ集』は世に出ることになる。

ドイツ語の在り方をめぐって、普遍のかつ抽象的な規範性にいち早く到達しようとするアーデルングとは異なり、むしろ、過去の一回的・個別的産物としての文学言語を、当代のドイツ語にとって重要な資料と見なしたのがスイス派であった。とりあえずこの立場の近くにレッシングが立っていることは確かだろう。ただし中世ではなく近世を視野に置くとすれば、レッシングがローガウという近世シュレーゲンの作家、つまり近世ドイツの文学的中心地に活動した作家を取り上げたことの意味は大きい。というのも近世、特にその後期をなす17世紀の文学は、18世紀において、一般にその過剰な装飾をまとう、もったいぶった文体のために、具体的にはローエンシュタインやホーフマンズヴァルダウ的な文体のために、酷評を受けていたからである。かのバッハが、「誇張癖」のために時代遅れと見なされた彼の音楽性を、「詩におけるかつてのフォン・ローエンシュタイン氏と同じ存在」だといってシャイベから非難されたのと同じようである。

しかし状況を仔細に見れば、18世紀は17世紀のすべてを拒否していたわけではない。それどころか、ローエンシュタインやホーフマンズヴァルダウの文学を批判する当人が、同じシュレーゲンの一作家を、つまりマルティン・オーピッツの偉大さを高く評価して、そこから18世紀に一種の「オーピッツ崇拜」が生起することになる。その当人とはつまりゴットシェットのことであるが、彼は17世紀文学伝統の批判者であっただけでなく、ある側面においてはその重要な継承者でもあった。¹¹つまり、未だバロック的「虚飾」に浸されておらず、R・アレヴィンの言葉で言えば「バロック以前の擬古典主義」(vorbarocker Klassizismus) に貫かれ、主にロマンス語圏に由来する詩学原則への忠実さを維持しようとしたオーピッツの穏当な文体と作風が、18世紀文学の出発点において一つの模範とされたのである。ゴットシェットは1739年のオーピッツ没後百年の記念の年に言う。最高の賞讃に値するのは、ただ「偉大なるオーピッツの

健全にして純粹、そして自然な美しさをもつ機智に最も近くある」ドイツの詩人だけであると。そしてこの種のオーピッツ礼賛の声は、その不倶戴天の敵であるはずのスイス派ポドマーにも共有されて、17世紀文学をオーピッツからの「逸脱」の歴史と見て嘆く次第となるのである。¹³

レッシングもまたこのようなオーピッツ像の影響下にあったと思われる。同じシュレーゲン詩派に属したチェルニングやスクルテートスといった詩人にも評価の目を向けるレッシングは、18世紀が17世紀を非難するときに決まり文句のように登場する「誇張」(Bombast)や「虚飾」(Schwulst)という語を用いて、それが例えばスクルテートスの実作品のなかにはおよそ目立たず、むしろ「真の高貴さ」(wahres Erhabene)が感じられるという。その文体に見えるオーピッツ的特徴をレッシングの言葉で説明すれば、「彼が最もオーピッツである時には、真のオーピッツの響きがある。思考は正確にして高貴かつ目新しい。そして表現は軽快だが力強く、また精選されたものでありながら自然である。」¹⁴

レッシングのローガウ評価もまたこの線上にあって、『辞書』の冒頭につけられた『ローガウの言語に関する暫定的報告』には、現代から見ればいささか驚かざるをえない評価も含みながら、次のように言われる。

ここで取り上げる詩人の言語は、あえて申すなら、オーピッツの言語、そしてオーピッツの同時代人にして同郷人たちのうち最良の人びとの言語である。ここで、オーピッツに次ぐ地位がチェルニングにふさわしいとすれば、チェルニングに次ぐ地位がこのローガウに与えられよう。¹⁵

レッシングの思い描くオーピッツ的理想文体において、一つの重要な要素となっているのは、先の批評の言葉にも含まれていた「自然な」(natürlich)という事柄である。この形容詞には様々な含意を読み取ることができようが、ここで強調されるべきは、真にドイツに生まれた(von Natur aus)、ドイツ語に土着の表現の模索という点であろう。つまり同じ近世バロック期の作家ではありながら、ロマンス系の文学に大きな影響を受けたホーフマンズヴァルダウなどの技巧的かつ誇張された文体とは異なり、また近世以後の大きな禍根となっているフランス語など支配的外国語の影響を脱した、ドイツ語独自の言語表現の可能性を、今一度オーピッツに立ち返ることによって追究したのである。『ローガウ辞書』には、ローガウ自身の用例と並んで、再三にわたりオーピッツからの

引用が登場する。

ここでまず想起したいのは、自国の過去の文学に対するレッシングの関心が、語源研究的な意図に強く規定されていた点である。「一つの事物を知っていて、それがどういう名前であるかを知っているだけでは、わたしはおよそ満足することができません。その事物がなぜそういう名前であって他の呼ばれ方をしないのか、それをぜひとも知りたいとしばしば感じています。要するに、わたしは断固たる言葉の詮索家なのです。」¹⁶今言及したスクルテートスに関する著作では、『ローガウ辞書』と同じく、言葉の由来を尋ねる方向で論述が行われる。そして例えば „Brunft“ と „Brunst“ の項に見えているように、その論証は実に理路整然たるものであり、後のグリム辞典において彼の跡付けの正しさが証明されているほか、クルーゲによる語源辞典ではレッシングの記述がそのまま取られることにもなるのである。もちろんレッシングの論法は常に正しかったわけではなく、現代の言語学的知見に照らして不適当な記述も時に混在するようではあるが。

語源的論証の結果的な当否はともかく、レッシングが個々の言葉の源に帰ろうとしたこと自体は、さらに彼が方言を重視したことと深く関連し合っている。方言には、古い時代の言葉と意味が保存されている。そしてレッシングの時代には見えにくくなった言葉の原義を、彼から百年前のシュレーゲンという辺境に生きた詩人に見出そうとしたのが『ローガウ集』の一つの意図だったのである。それから約15年後に出るアーデルングの辞書に、レッシングは少なからぬ不満を抱き、やがて『アーデルング標準ドイツ語辞典に関する注記』（1774年頃）を記すことになるが、そこには、方言をめぐる両者の実に対照的な立場が露わになっている。

アーデルングは方言に対して否定的だった。いま少し正確に言えば、当時の優れた詩人たちが用いた形での東中部ドイツ語——とりわけマイセン語、従って実際には一つの方言——を唯一の理想言語として標準語に認定し、それ以外の方言を排除する傾向があった。「ザクセンが、政治的、文化的、経済的に、他の領邦国家よりもはるかに優れていること、そしてルター17の聖書翻訳の影響力に関して、ザクセンははるかにまさっていたこと」から、東中部ドイツ語、それも特定の作家の文体を模範とする文字言語としてのドイツ語方言を優遇し、統一的文語の形成を目指すのである。

地方的な言葉から完全に解放されたような、名望に値する作家を見つけることは容易ではないだろう。しかしともかくもそうした地方的語彙はシミとして残りつづけており、全体が素晴らしいものになればなるほどそれは目立って、全体の姿を歪めてしまうのである。今日、幾人かの天才と呼ばれる人びとが、最下層の賤民の言語を詩神ムーサイの言語に変えようと努力している以上、この事柄に関しては厳格であることが切に求められる。¹⁸

レッシングは違った。彼はクロップシュトック宛の書簡で言っている。「ドイツ語の書き言葉(Büchersprache)、ないしは標準ドイツ語と呼ばれるものは、ドイツのすべての方言(Mundart)から選別されたものという程度に理解しておくべき」だと。そして標準ドイツ語(Hochdeutsch)となった、ほかでもない高地(Hoch)ドイツ語(-deutsch)に対して、なおも低地ドイツ語(Niederdeutsch)が持つ独自の語彙に敬意をはらいつづけるのである。『ローガウ辞書』では、„Degen“ や „bieder“ といった古風な単語のもつ深い意味合いを強調しており、やがて自作『エミリア・ガロッティ』(1772年)のなかでそれを用いる。アーデルングの辞書では、この二つの言葉は使用禁止の宣告を受けているの¹⁹のである。

リヒャイの『ハンブルク方言辞典』をめぐる論評(1754年)のなかでは、この著作の意義を高く評価し、普遍的ドイツ語辞典を完成させるという企ての前に成されるべき、一つの重要な仕事を確認する。いわく、

ドイツ語における語の広範な研究について幾分かの理解をもつ者ならば、この種の総覧がもつ有用性と必要性を疑うことは決してないだろう。わたしたちは、すべての地方の独自の言葉を集め、そしてそれを互いに比較した後によりやく初めて、ドイツ語というものの語源辞典について考えることができるのである。²⁰

結局のところその大志は果たされなかったにせよ、レッシングのドイツ語理想にとって方言のもつ意味は非常に高かった。ユストゥス・メーザーはいみじくも言っている、レッシングとは、「地方的な表現と語彙を、必要の要求するところに²¹応じて、最も幸福な形で国民化(nationalisierte)」した最初の人物であったと。第14『最新文学書簡』(1759年)には、「もしヴィーラント氏が、あのようなフランス語の言葉ではなく、スイス方言に由来する数多くの素晴らしい言葉

を救い出してくれていたなら、感謝に値したのですが。²²」といったような言及がある。標準語と方言との有機的な関係をめざすレッシングの、方言に対する強い思い入れが如実に現われているが、特にシュレージエンとスイスというドイツの両端に位置する辺境に重要な表現の宝庫を見ているようで、『ローガウ辞書』のある項目のなかではローガウとともにボドマーの例を挙げ、その両者の故郷には「ドイツのたいの地域には疎遠なものとなってしまった古き良き品位²³」があると述べている。

語彙上の一致さえ、この遠く離れた二つの地域には観察された。『ローガウ辞書』の冒頭部の記述であるが、レッシングの時代には「五種類の」(fünferlei) というような形で、もはや「分割する意味での数詞にしか」接続されなくなっていた語末音節の -lei が、近世のシュレージエン方言とスイス方言においては、なおもあらゆる代名詞と結ばれることが可能であり、そこに端的かつ力強い表現を実現していたという。レッシングが挙げる例で言えば、「彼自身の生まれ、そして彼のよな種類の生まれ」という二重の意味を含みうる表現は、ともすれば „eine Geburt, wie seine war“ と副文まで導入して冗長化してしまうのに対し、方言に残る古い語法では „seinerlei Geburt“ と実に簡潔に表現できたのである。重要なのは、レッシングが挙げるスイス方言の例はフリッシュからのもので、しかもそれはガイラー・フォン・カイザーズベルクの民衆説教からの用例であった。ここに、文字言語のなかに残存する口承言語の姿が見えている。²⁴

方言のなかに古語を探し求める、ないしは、なおも古い意味で使われつづけている言葉を探るレッシングは、同じ精神から、古来のドイツの格言にも注目する。知識人のまわりくどい迂言性とは異質な、パンチのきいた民衆的な表現は、古来の格言集のなかに無数に保存されている。ヴォルフエンビュッテルに保存されていた中世ドイツの格言詩 (Priamel) 資料を渉猟するほか、レッシングは、S・フランクやツィンクグレーフ、レーマンらいくつかの近世格言集からも抜粋し記録していた。

レッシングがローガウの寓意詩集に特別な関心を示したことは、これで十分に納得がいくだろう。規範的かつ標準的なドイツ語が模索される時代のなかで、レッシングは、人工的・抽象的言語を確立する一歩手前に立ち止まり、ドイツ自身の伝統から、生きた個々の言葉を蘇らせようとする。近世17世紀の資料、なかでも特にローガウの寓意詩は、語源・方言性・格言性の観点から又とない

重要な源泉となったのである。

言語の揺籃期に育まれた方言や格言は、アーデルングらがその確立のために努力している、人工的ないわゆる標準語とはまったく様相を異にする言語から成る。つまり後者が、究極的には書物に印刷されるべき文字言語であるのに対し、前者は根本的に口承言語として生まれ、伝承されてきたものだからである。古来の言葉、元来の言葉に立ち返ることによってレッシングが目指したのは、現在の言葉を「若返らせる²⁵」ことだったと言われる。フランス語を代表とする外来語の無作為な移入などによって、いわば疲弊し老いさらばえた18世紀中葉のドイツ語に、過去の純朴な言葉の活力を与えようとしたわけだが、それはまづもって文字化されていない、口承性の圏域に生きた言語に基づくことにおいて企図されたと考えられるのである。つまり死んだ文字に再び息吹きを与えるべきものは、口語りの声なのだ。

3

『ローガウ集』出版の年、レッシングは『最新文学書簡』のなかで3度この寓意詩集に言及している。まず4月26日の第36書簡では出版予告を行い、6月21日の第43書簡で刊行の報告、そして続く第44書簡のなかでは『ローガウ辞書』からの抜粋を載せている。この語彙集については後に随時見るとして、まず確認すべきは、最初の第36書簡に、これもまた抜粋として掲載されたレッシングによる『ローガウ集』への序文である。「1759年5月5日、ベルリン」と記されたこの文章は次のように始められる。

フリードリヒ・フォン・ローガウ、前世紀の中葉に、ザーロモン・フォン・ゴラウの名のもと、『ドイツ寓意詩三千』を出版したこの人物は、われわれの最良のオーピッツの詩人の一人に数えられるべき十分な資格をそなえている。²⁶

ローガウへの評価は、18世紀のオーピッツ観の線上にあることがまず示される。しかしレッシングの同時代には、ローガウという名前こそ知れ、およそその作品まで目にしたことのある者は少なかったという。

ここでローガウの重要性を示すべく引き合いに出されるのが、ローガウ以後

のもう一人の重要な17世紀寓意詩詩人ヴェルニッケである。レッシングの序文によれば、ドイツ語は「その冗長さゆえに」寓意詩のジャンルには適さないという師モールホフが語った言葉に対して、ヴェルニッケは反例を示すことができなかったというが、なぜヴェルニッケはそこでローガウを挙げなかったのか。レッシングは自問している。「彼はすでに当時からそのような忘却の淵に沈んでいたのだろうか。」

こうしてレッシングはローガウの紹介に入るわけであるが、不明な点が多いこの作家について、まずは解明されているかぎりの伝記的事実をたどっている。ローガウ家という地方貴族の一族の系譜から説き始め、生まれた年のこと、学生時代の資料が残っていないこと、そしてリーグニッツ公の官吏となって働くローガウの経緯などを、シュレージエンの一宮廷の政治的状况に一瞥を投じながら物語る。またローガウは1648年に結実協会への入会を果たしていることから、それに関して、『芽生える者』の名をもつ²⁷彼が、この協会の記述のなかで、著作をもつ会員として彼を数えいれていないことが、ローガウの忘却を助長したのではないかと推測する。そして1655年にリーグニッツで没したと。

以下の後半部は作品に関しての言及となるのだが、まずは編集者として大幅に作品数を削ったことの原因を述べる。いわく、総勢「3553編」を数えるローガウの寓意詩は、「すべて良質のものであるなどということがありうるだろうか。率直に申し上げて、詩人がまったく蔑ろにされてきたことの最も主要な根拠の一つは、まさにこの途方もない量にこそあると思われる」。というのも、好奇心に駆られて本を紐解くたびにそこには「非常に月並みな作品」が見つかったのだから。

結局この『ローガウ集』では三分の一だけが残される。どのような優れた詩人も、せいぜいその全作品の三分の一程度しか良質のものはないから、というのが理由である。しかしそれでもなお、掲載した千点ほどの作品がすべて傑作であるわけではない、と留保がつく。そしてローガウ寓意詩の核心と見なすべき注意点が挙げられる。

ともかくも、実にとるに足らないような作品にさえ、なぜそれがここに選ばれたかという理由のいくばくかが理解されるならそれで十分である。つねに機智が利いていないとしても、しかしそこにはつねに、良き意味、偉

大な意味、詩的なイメージ、力強い表現、素朴な言葉遣いなどがある。

続いて、彼ら編者がこの詩集の作成に用いた古い版には、ローガウ自身の筆によるものと思われる、「不自然で硬い」表現を修正した跡が見られることを一つの理由に、その修正をそのまま採用したこと、そして他の箇所にも同様のテキストの改変を施したことを打ち明ける。しかし――

このわずかで些細な変更により、古き詩人の姿はまったくもって現代化されていないことを私たちは強く自覚している。彼自身の純粋な軽快さにおいて度がすぎていると見られた場合にのみ、少々彼に手助けを申し出たにすぎない。そして変更は、彼自身の言語がもつ精神において行うよう努めた。

序文の終わりに近づいて、『ローガウ辞書』への言及がくる。この辞書は、「この彼の古き言語に対して抱く私たちの敬意が、いかに大きいか」ということの現われであり、個々の優れたドイツの詩人について、この種の辞書が作成されることを土台とし、いつの日か「私たちの言語の普遍的辞書」が完成されることを望むと述べている。

最後に言及されるのは、1702年に何者かの手によって出ていたというローガウ作品集のことである。そこには、およそレッシングには許容不可能な形でテキストの改変が行われていたらしい。そのために失われたものを惜しみつつ、ローガウ詩の長所を挙げている部分は参考になるだろう。いわく「意味の力強さ(Nachdruck)、繊細さ、機智、あらゆる「言語的正しさ、詩人にそなわるすべてのよき詩的名声、すべてのよき特性、それどころか人間としての良識」である。そして結びの言葉では、「自然かつ美しい」ローガウの寓意詩をうまく保存できたことを望むと述べて、以上の序文を閉じている。

ローガウの言語に関するこのような言及は、『ローガウ辞書』の冒頭に付けられた『暫定的報告』においても繰り返されている。序文への補完の意味もこめて、ここで概観しておきたい。

ローガウは18世紀のオーピッツ評価の線上で読まれ、すでに一度述べたように、この『暫定的報告』の冒頭はまさにそれを証するものであったが、それに続いてレッシングは言う、寓意詩においてローガウは、「あらゆるジャンルにつ

いてドイツ語が「もちうる「適応性」を示すことができた」と。そしてローガウの言語性を、「適切」さとして記述する次の有名な一節がくる。いわく、「彼の言葉は、言い表す事柄に対して常に適切である。教え論するときには念を押して核心をつき、罰するときには激情的で響きゆたかであり、そして愛を語るときには優しく、媚態をまとい、ここちよく戯れる。嘲るときには滑稽かつ素朴、²⁹ただ笑いをまきおこしたいたけのときにはひょうきんで気まぐれだ。」

続く箇所はさらに重要である。つまりローガウの17世紀は、レッシングの18世紀と同じ問題を、つまり外来語の無思慮な輸入による言語的混乱という事態をかかえていた、とレッシングは考えるのである。その状況下で、極端な純粹主義者——ツェーゼンのような——をも生み出しつつ、ドイツ語の行方は宙に浮いたままだった。しかしローガウは中庸を見事に貫き、外来語の流入のなかで不可避的に古びていく「有用なよき言葉」を守り抜いた、とレッシングは評価する。

レッシングがくりかえし肯定的な意味をこめて用いる「古い」という形容詞は、したがって必ずしも中世のように時代的にまさに古いところまで遡る必要はなかった。そうではなく、まさにレッシングの同時代においてなお進行しつつあった外来語の恣なる侵入のなかで、「古びざるをえなかった」事態のことを言っているのである。何と言ってもローガウは、中世詩人に比べれば、ほんの百年前の詩人なのであるから。

ところで外来語は、まずもって知識人による書物を通した輸入による言葉だった。その意味では、ここに[文字言語・外来語]対[口承言語・古来のドイツ語]という図式があぶり出されてくるだろう。はたしてレッシングはこの『ローガウ辞書』³⁰の読み手として、いわゆる「詩人」だけでなく、「弁論家」、つまり口頭による言語の実践者をも視野に入れている。そしてここに「詩人」と呼ばれる存在さえ、単に文字言語の操作にのみ関わるものと考えられているかどうか、それは十分に吟味すべき点である。折りしも1750年頃からの半世紀は、読書の大衆化とともに文字言語の支配力が強まり、例えば黙読という作法が一般化していくなかで、詩人たちは抒情詩の根幹と思われた口承性の再検討と再活性³¹に向かうことを余儀なくされていた。レッシングにおいては、日常の実用言語そのものとして、つまり文字だけでなく口頭の言語にも重心が置かれていることは確実である。

やがてレッシングは、方言、とりわけシュレーゼン方言に注目すべき理由を述べる。いわく「その言語においてわたしたちは、最初のよき詩人たちを得たから。」ここに言われる「わたしたち」という言葉には、中世に対する場合とは異なる、まさにレッシングと同じ近代的状況——つまり初期近代とも呼ばれる近世を、近代の一つの前段階と見ることに——を生きた詩人たちへの、強い共感がこめられている。ローガウはレッシングにとって、決して「古い」詩人ではなかった。

4

レッシングの序文に述べられていたように、ローガウの詩は17世紀そのままの姿で刊行されたのではない。共編者ラムラーの述懐によれば、レッシングは「作品の選択と彫琢はすべて私に委ねた。そして彼自身のほうは詩人の生涯について一文を草し、このいにしへのシュレーゼンの詩人についての辞書を付属させた³²」ということである。もしこの言葉を鵜呑みにするなら、レッシングは作品の改変には関わっていないことになるが、一つ気になる事実はある。後にラムラーは、彼一人の編集で『ローガウ集』第二版を出版しており、そこで第一版以上の大幅なテキストの改変を行っているのである。それは1791年、つまりレッシングはすでにこの世にない時のことで、ラムラーは、レッシングによる序文と『ローガウ辞書』さえも削除するという念の入りようであった。すでに第一版の時点で、実際には編集の進行をめぐる両者間に摩擦があったらしく、とすれば、先のラムラーの言葉には、作成上の仕事分担をいささか意識的に強調しすぎているかのような感を受ける。おそらくは第一版において、テキストの選定と変容にレッシングは何らかの影響を及ぼしたと考えて問題はないだろう。果たして、同時に刊行されたはずの『ローガウ集』とレッシング個人による『ローガウ辞書』には、矛盾する箇所と一致する箇所とが混在する。前者の例としては、『ローガウ辞書』で、„Artzung“ という語が推奨されているにもかかわらず、『ローガウ集』では „Arzeneykunst“ という当代の言葉に変更されている。ここにはおそらく、ラムラーの強い関与を見て取ることができるだろう。しかしそれに対して、例えばレッシングが『ローガウ辞書』のなかで、ローガウの多用する好ましい言い方として評価する否定表現の „noch-

noch“ は、『ローガウ集』においても „weder“ への現代化を受けずに残されているのである。

さて、このような二者間の緊張を反映させている『ローガウ集』では、量的には元の約三分の一、つまり1284編が13巻に分けて収録されている。各巻の冒頭と結びにはローガウ寓意詩の一つの典型的なものに属する、自分の詩作品と詩作行為そのものを詠った詩が置かれていること、それから第6巻が内容的な統一をもつことを除いては、ほぼ元のローガウ集と同様に、多種多様な内容の詩が無秩序に並んでいる。元の作品との異同については、ホイシュケルによる比較研究³³があるので、主にそれを利用しながら、口承的言語としての方言と古風な表現の取り扱いの問題を、以下のいくつかの項目から検証してみることにする。ちなみにホイシュケルの論考自体には、文字言語と口承言語の区別という視点が明示されているわけではない。

*

(イ) シュレージエン方言の発音と綴りの扱いについて——結論から言えば、編者の処置に統一性は見られない。たしかに、シュレージエン特有の音と綴りを抹消した例は多い。例えば「慈悲深き神」という作品がある。

神はよきものを造られる、そしてわたしたちは悪きものを。

神は葡萄酒を醸されるが、わたしたちは麦酒だ。³⁴

「酒を醸す」という動詞は、元はシュレージエン方言の „bräut“ であったが、『ローガウ集』では „braut“ と音を修正している。同様に脚韻に関しても、シュレージエン特有の現象である u/o、i/ü、i/ö、ö/ü といった組合せでの押韻が広範に見られていたものを、音の修正や単語そのものの変更によって、東中部ドイツ語、いわゆる標準語に適合させている。

しかしホイシュケルの挙げる例を見るかぎり、それに劣らず残された方言の例もまた非常に多い。特に「みつばちの由来」と題する長めの詩はその宝庫である。脚韻として置かれている場合、単語の置換もままならず不可避免的に残された場合もあるだろうが、修正されたことと、残存したことと、どちらを重視すべきだろうか。判断は後に行うとして、とりあえず次の点を見てみることにする。

(ロ) 造語・古語の扱い——ローガウは、多くは2本の並行するハイフンを使いつつ、独特な造語を行うに巧みであった。例えば〔Heldens=Dingen〕,〔Lebens=Bedurfft〕,〔dem sauren nimmer=lesen〕,〔durch finstres sauer=sehen〕など。これらを『ローガウ集』では、それぞれ〔Heldendingen〕,〔Lebensbedurfniß〕,〔dem sauern Nimmerlesen〕,〔durch finstres Sauersehen〕といった形に、つまりハイフンは取り去ったうえで、当時から支配的になっていた、名詩を大文字書きとする文字言語の統一的規則に従わせている。しかし文字面は多少変わっても、造語として元々もっていた、ときにぎこちなく、素朴に響く口承的な連結性の効果はなおも残っており、元来は独立していた個々の単語の表現力を、文字言語のなかにうまく移し入れたとも言えよう。

ただしここでも例外はあって、〔im leeren nichts nicht thun〕というような同語反復的で強い口承性をもつ言い方を、端的に〔Garnichstthun〕と修正している例もある。

次に古風な単語や表現についてであるが、この点でも統一性は見られない。〔Ruch〕,〔Geitzwanst〕,〔redlich deutsch geschicke〕,〔eitel Lieblichkeit bringen〕といった表現が、〔Geruch〕,〔Geizhals〕,〔alte deutsche Redlichkeit〕,〔Gefälligkeit erwerben〕という風に現代化、つまり18世紀化されるかと思えば、〔Grau〕というシュレージエン方言がそのまま残されていたりする。

多少興味を惹くのは、ザクセン人であるレッシングとブランデンブルク人であるラムラーが、シュレージエン方言の正確な意味を解さず、そのため修正に際し間違った意味の単語を当てている箇所がいくつか見られる点であろうか。

(ハ) 語形変化——まず動詞について、強変化過去形の一人称・三人称単数において、ローガウが弱変化動詞とのアナロジーから〔stahle〕,〔ware〕などとしていたものを、すべて当代の文字言語の規則に適合させ、e音を省いている。ただしこれも韻文としての性格上、韻律上の理由から元のままに残された例もまた数多い。

次に形容詞変化について、レッシング自身も『ローガウ辞書』のなかで注記しているように、ローガウは形容詞を、中性名詞でなくとも無変化のまま名詞の前に置いていることが多い。例えば〔ein gut Soldat〕,〔ein ehrlich Weib〕などである。後者については正確な変化形が置かれることになるが、韻律上、音節の数を増やすわけにはいかない場合も多い。従って、ローガウの表現のま

ま残すか（前者）、あるいは音節の少ない類義語に置き換えることが行われる。

興味深いことに、ラムラーが独自に出版した第二版には、〔ein ehrlich Kerl〕という表現がなおも残されており、このような形容詞の無変化についてラムラーは、これは「一般大衆の話し方 (Sprechart) から取られたものであって、ここではまた庶民の口から語られたものとして置かれたのである。書物言語 (Büchersprache) では、通常このような形の短縮は許されない。ただし語尾 -es (中性) については事情は別であるが。」と弁解ともつかぬ主張を行っている。ともかくもここに、問題の文字言語と口承言語の緊張関係が観察されることは明らかである。

(ニ) 語末の省略——(ロ)の形容詞変化に関連する事柄でもあるが、ホイシュケルによればゲーテにもなお見られるという古風な表現、すなわち複数の語要素からなる表現における、第一要素の語末の省略という現象がローガウにはある。例えば〔Bös' = und Guten〕,〔vier' = und zweyen〕,〔freund =, hülf = und tröstlich seyn〕,〔für Holl = und Engeland auffgerührten...〕などであるが、寓意詩という短い詩行空間のゆえもあって凝縮されているこれらの古風な言い方は、大体において以下の通りに現代化される。すなわち、〔Bösen, Guten〕,〔vieren, auch von zweyen〕,〔freundlich, hülflich, tröstlich seyn〕,〔für Englands und Hollands erneuten...〕である。ただしこれは文字言語の規則に合わせたというよりも、バロック時代特有の人工的文体を捨て、詩行の明解性を高めるための修正を行ったものと見るべきであろう。

(ホ) 統語論上の特徴——ヘルマン・パウルの用語にいう「心理的」配慮から、ローガウの詩では重要度の高い、つまり強調したい語を自由に前に登場させることが行われる。これは、主語や代名詞はなるべく前に置くとか、従属接続詞は先頭に置くというような、当時一般化しつつある文法規則に反するものである。例えば〔Wie recht ich danken sol〕,〔Das Messer eh es fühlet〕,〔Auff Strassen was man stiehlt〕というような例がある。これらは、いわゆる文法規則に適合させるなら、〔Wie ich recht danken soll〕,〔eh es das Messer fühlet〕,〔Was man auff Straßen stiehlt〕となるべきであり、『ローガウ集』もまたその通りに修正してゐる。

ローガウのこの「心理的」表現法の範疇で考えられるべき事柄としては、さらに否定辞 nicht や nichts の位置の問題がある。ローガウはこれを好んで行

末に置き、nicht mehr といった言い方さえも逆転させてしまう。ある意味でこれは口頭の場面では用いられやすい、つまり口承性の強い言い方であるが、この点でもおよそ修正が施されたようである。

(へ) 無冠詞の名詞——『ローガウ辞書』でレッシングは、アルファベット順の各単語項目に入る前に、ローガウのいくつかの言語的特徴を総括しているが、その第一として挙げられるのが、この冠詞の省略という点である。レッシングはこれについて、例えば〔Der Neid hat scheel gesehen〕という文章において主語が無冠詞にされることを指摘し、それによって「嫉妬」という名詞が擬人化され、強力かつ詩的な効果をもつことになるという。³⁶

ホイシュケルによれば、この「古風にして、また真に文学的な表現法」は『ローガウ集』においてもほとんどの場合保存されているという。そして注目すべきことは、冠詞の省略を特に好むのが、二つの互いに対立・補完しあう要素から成る表現、しかも多くは頭韻によって共鳴し合っている表現の場合だという。例えば、〔Haus, Hof〕, 〔Scheun und Schopf〕, 〔Asch und Kohle〕, 〔Furcht und Hoffnung〕, 〔Schmerz und Reu〕, 〔Schmuck und Schminke〕, 〔Ohr und Auge〕, 〔Durst und Hunger〕などである。二語以上にわたる場合、つまり〔Stadt, Land, Mensch, und Vieh〕のような場合は、単純に詩行の制限によるとも考えられよう。しかしこのような対句的ないし羅列的表現が示すのは、明らかに口承伝統として伝えられてきた常套句の響きである。

ローガウと同じ17世紀に生まれ、レッシングと同じザクセンに生きた、そして両者と同じルター派に属した讃美歌の詩人パウル・ゲルハルトには、まさに同種の、つまり民衆の言葉に寄り添った口語りの響きがあり、これはドイツ詩のある種の典型を形成していく源となったものである。レッシング／ラムラーはそれと同種のものをここに確かに保存したのだった。

(ト) 冗語——主語や副詞句などを、意味上は不要であるにもかかわらず、代名詞などを用いて反復する冗語は、民衆性を色濃く漂わせるものである。この扱いについては、大半は修正されているものの、例外も少なくはない。例えば、〔Der Löw, der bleibt behertzt〕, 〔Des Nachtes, da schlemmt er...〕, 〔Jobs sein Weib〕, 〔der Deutschen ihr Papier〕, 〔Der Bauern ihr Verderb〕, 〔der Krieger ihr Gewinnst〕 などがあり、後者の二例は『ローガウ集』でも保存されている。

(チ) 首句反復(アナフォラ)——口承言語と深く関わりあう修辞学的技法のなかから、この首句反復をより多く用いているのは、実はローガウ自身もさることながら、それを修正している『ローガウ集』の方である。ローガウに内蔵されていた口頭での演示性を、さらに高めるべく、レッシングとラムラーのいずれか、あるいは両者が一致して改変したのである。例えばローガウの〔Mars ist nicht gantz verflucht noch völig durch zu ächten〕のような詩行が、〔Mars ist nicht ganz verflucht, Mars ist nicht ganz zu ächten〕と効果的に変えられる。この関連では、ローガウの冗長に墮した文章を短く区切り、疑問文による問いかけや演劇的な対話形式³⁹に作り変えた例もある。

またローガウの反復表現も吟味にかけられ、極端とみなされたものは削除、短縮化の方向で修正されている。例えばローガウにおける〔Ach! sprach sie, ach! ach! hätt ich〕は、〔Sprach sie: ach ich armes Kind!〕となる。またあまりに稚拙に響くと見なされた同音の連続も避けられる。例えば〔Aller Laster Laster ist〕は、〔Dies sind Laster aller Laster〕へ、また〔Von des Hofes Hofe=Leben〕は〔Von dem Leben an den Höfen〕と変えられた。

*

以上の考察への補完として、『ローガウ辞書』の冒頭部でレッシング自身がまとめている、ローガウの8点の方言的特徴を挙げておこう。すなわち、先の(へ)においてまず言及したところの①冠詞の省略、②全性別に渡っての形容詞変化語尾の省略、③無変化形容詞の名詞的使用、④意味上支障をきたさないかぎりでの、代名詞主語の省略、⑤分離動詞前綴りの自由な配置、⑥あらゆる代名詞と語末辞 -lei との結合、⑦数詞の形容詞変化、そして⑧語頭辞 ge- と be- の省略である。そもそもホイシュケルの考察はこれを基礎におきつつ行われたものであるが、とりわけ5番目に挙げられている点、つまり通常分離されない分離動詞の前綴りが、基礎動詞から離れて自由に置かれる点についてレッシングは、そこから生まれる「意味の力強さと炎のごとき活力」(Nachdruck und Feuer)を評価している。前者の „Nachdruck“——直訳すれば、「あとからもう一度押すこと」——という評語は、ローガウへの賛辞として、あるいは後述するように、形骸化した語彙への対立項そのものとして再三にわたりレッシングが用いた言葉であるが、⁴⁰いわば、口語りの言葉から隔てられ抽象化された文字と文法

の体系、紙の水平面に行儀よく並べられた言葉たちに、今一度、ドイツ人の息吹きを、つまり声として口から押し出される力を蘇らせたいという配慮が見え隠れする。

ただしレッシングは、この5番目の表現作法はもはや18世紀においては「強制的で冗長な感じ」をまぬがれないとも述べており、17世紀への羨望の念を抱きつつも、この点に関しては使用を断念する。レッシング／ラムラーが目的としたのは「明解さ」と「具体性」の付与⁴¹、そして「ローガウの言語を精錬し、硬さと過剰な負荷を取り除くこと」、そしてその一方で適度な「緊張と活力」⁴²——バロック期との対比からすればあくまでも適度な——を付与することであったというホイシュケルの総括は、ここに関するかぎり納得のいくものである。

しかしローガウを読むレッシングの言語的意識は、近世の方言・口承言語に対する注意深さとしてここに現われていることをまず確認しなければならないだろう。ゆえにレッシングは、例えば音声的要素に目ざとく着目する。8番目に挙げられるのは、動詞だけでなく名詩や副詞においても行われる前綴り *ge-*ないし *be-* の省略という現象であったが、これは省略によってなお前述の „Nachdruck“、つまり「意味の強さ」を失うことがなく、しかも「高次の文体」、つまり古典古代の三文体論における莊重体にさえ通ずるような「よき響き」を醸し出すというのである。そして外来語に依存することによってではなく、ドイツ古来の語を生かすことそれ自体において、古典古代の文体理想——近世以来のドイツの文人たちが、長くそれへのコンプレックスに悩まされてきたもの——が、場合によっては成就されうるのだと言いさえする⁴³。後年の集大成的作品、*プランクヴァース*と行途中の科白の交代によって人間の自然な対話の流れを実現しようとした『賢者ナータン』には、まさにこの形での過去分詞が用いられることになる⁴⁴。

『ローガウ集』をめぐる以上の言語的考察にひとつ付記しておくなら、レッシングとラムラーによる編集を経て、元の三千点余りの詩がおよそ三分の一に減らされるなかで、宗教色、つまりキリスト教色の強い作品はとりわけ顕著に削除の対象となったという見方がある⁴⁵。しかしこれは、いささか啓蒙主義期の産物であるという先行観念に引きずられすぎた感もしないではない。この点については、さしあたりホイシュケルの見方に拠っておくのが適切であると思われる。つまりレッシングとラムラーには、たしかにキリスト教の信心書を作成

するような意図は毛頭なかった。しかし同時にまた、特別に宗教的な詩を取り扱う意図を明確に抱いていたわけでもなかった、というものである。三分の二が削られるという状況のなかでは、元にあった宗教的寓意詩についても相当数が消滅する運命にあった。そして、むしろ詩集全体の構成としては元の作品の姿をかなり忠実にとどめている、つまり多様なものが多様なままに、時の流れのままに羅列されていく、いわば世界の「レヴェー」⁴⁶としての詩集の性格をそのまま保存したものになっている、というのがホイシユケルの立場である。⁴⁷

ここで深く立ち入って論じることはできないが、ローガウの寓意詩集のなかには、あたかも近世という時代の写し絵のように、ドイツ社会の明白な世俗性とそれによって相対化される宗教性が、そして同時にそれに抗うかのようなルター派の堅実な信仰表明とが、すべて綯い交ぜに付んでいる。そしてその姿はレッシング／ラムラーの版にもたしかに残されたのだった。これまで言及したローガウに関するレッシングの論述から見て、彼の関心はやはりローガウの宗教性によりも、まず言語性にあったと考えられる。しかしその上でなお強調するならば、啓蒙主義者レッシングは、同時にきわめて宗教的な人間でもあった。後に見るように、そのことの意味はおそらく重大である。

5

方言と、そのなかに保存されたドイツ土着の表現を再び活性化させる一つの手段として、レッシングは辞書という形式を用いた。時代の潮流として規範化されていく文字言語のなかに、口承言語がもつ生命力の居場所を残そうとしたわけだが、しかしそもそもこの辞書という形態こそが文字文化・印刷文化の産物であって、つまりレッシングは、18世紀の知識人としてあくまでも文字性の基盤の上に立ちながら、同時に口承性と関わりあうという、ある意味では二律背反的な試みに向かっていたのである。

オンクが言うように、「書くことと印刷から、ある特殊な方言が生み出される」。ドイツ語の標準語は、もともと「地域方言ないし階級方言だった」言葉が、「書くことをとおして整序される国民言語としての地位をえることによって、広汎な仕方では書かれることのない他の諸方言とは異なった種類の方言ないし言語になった」ものである。この文字言語としての標準語は、規範文法と

いう範疇を誕生させるとともに、ほかでもない辞書という記録形式をもつこと
によって膨大な語彙の集積を可能にした。「方言的な形式のあるものは捨て、方
言とはまったく異なった源泉からさまざまな語彙の層をつくりだし⁴⁸」たうえて、
辞書という、「声の文化の世界から限りなくへだたっている」⁴⁹記録形式を充実さ
せていったのである。

しかしレッシングの『ローガウ辞書』は、この脱方言化の流れ、方言という
根から切り離されていく言語の抽象化の流れと完全に一致するものではない。
ここでは、まさに同じ時代に古い文学との関わりをもったボドマーの状況が参
考になるだろう。中世ミネザングの発掘者として後続の詩人たち——グライ
ム、ゲッティンゲン森林同盟の詩人たち、ヴィーラント、ビュルガー、ティ
ークなど——に多大な影響を与えた彼は、同時にまた近代の発端に立つ詩人とし
て、単に、中世の口承世界への回帰を無邪気に願ったのではなかった。その世
界に彼を導いたものはあくまでもマネッセの書写本、つまり文字文化の産物
——ただし印刷文化の前段階としての——である。文字性と口承性の緊張と矛
盾を自覚しつつ、しかし「古き詩の再活性は」、「文字として蓄積されたテキス
トが、ふたたび口承的文学実践のなかへ包み結ばれるときにのみ成就する」の
だという方向を、ボドマーはたどるのである。ここに「口承的文学実践」と言
われているものは、主にハーゲドルンに代表されるアナクレオン派の抒情詩
(Lyrik)の類である。⁵⁰

『ローガウ辞書』の読者として「弁論家」もまた想定されていたように、レ
ッシングにとってのローガウは、ボドマーにとっての中世ミネザングと類似
の性格をもっている。つまり古来の文字記録から現在の実践的口承文化への作
用という道筋を描くものなのである。ただし冒頭にも述べたように、レッシ
ングによるローガウへの取り組みにおいては、寓意詩という特定の文学ジャンル
への意識は希薄であり、その点では、ボドマーにとっての中世ミネザングと
近代初頭の抒情詩との関係にそのまま重なり合うものではない。

ローガウの表現性は、文学言語に関するかぎり、レッシングの寓意詩よりは、
むしろ彼の戯曲にこそ作用したのではないかと思われる。「論理から、否、分析
から構成され、支持」されており、何らかの比喩を表現する「精神的運動が直
感によってではなく、比喩の概念的な説明とその理由を示すことによって継続
される」⁵¹文体、あるいは「論理的エネルギー」をもつ表現などと評されるレッ
⁵²

シングの戯曲文体は、たしかにローエンシュタイン的な意味でのバロック演劇文体、つまり錯綜を極める、学識と比喩装飾に彩られた文体とはおよそ様相を異にする。荘重な王侯貴族の言葉ではなく、市井の人間が話す言葉としての「自然さ」を求めつつも、だからといって弛緩した散文に墮していくのではない。むしろここには、演劇人エーゴン・フリーデルが慧眼にも看取したもの、つまり人間同士で、あるいは一人の人間のなかで展開される、「つねに架空の論敵を想定」した、厳しい緊張をもつ「対話の性質」が核心として含まれている。ブランクヴァースは、この目的のためにドイツで初めてここに命を得たのだった。

興味深いのは、フリーデルによるこの言及が、ルターとレッシングというそれぞれ近世16世紀と近代18世紀の発端に立つ文人について行われたこと、そして両者に共通する「独自の演劇的才能」を主張することである。17世紀のローガウとは、ドイツ的・キリスト教的な謙抑体の表現性においてまさに両者の媒介者であったのだが、それについてはここでは論じない。ただしこの関連では、例えばレッシングが戯曲中に用いられる文体層を拡大したこと、しかもまさに謙抑体的な、いわゆる低い、民衆的な層へと拡大したことは強調しておいていまい。レッシングは第51『最新文学書簡』のなかで、戯曲の科白に用いるべき言葉遣いについて次のように言っている。これはただし「正確至極なラシーヌにのみ、よき趣味を見出し、シェイクスピアなどまったく知らぬ不幸な人びと」には、縁のない提案であるらしいけれども。

最も高貴な言葉は、まさにそれが最も高貴であるがゆえに、急ぎ話すとき、特に激情にとらわれているときには、まっさきに私たちの頭に浮かんでくることはないのです。高貴な言葉は、あらかじめ行われた熟慮を明かし、主人公を朗読家に変えてしまいます。そしてイリュージョンは妨げられてしまうのです。したがって、とりわけ崇高な思索を、最も卑近な言葉でまとい、そして最も高貴な言葉ではなく、最も力強い(nachdrücklichste)言葉をこそ——たとえそこに、いくばくかの下賤な副次的概念が伴おうとも——激情のなかで擱ませるなら、それは悲劇詩人たるものの偉大な技であるのです。⁵⁵

荘重体という悲劇の規範的文体に盲従するのではなく、むしろそこから正反対の低い地平へ、つまり謙抑体的文体へと下降していくことで、より自然かつ

強固な悲劇性が誕生するというこの主張は、ドイツの戯曲文体の可能性を大きく拡大したレッシングの一つの重要な信条告白である。

規則化された人工的世界とは相容れぬものとして演劇というジャンルを考え、そこに求めるべきいわゆる自然さを、例えば生身の人間の対話というような素朴な意味ではあれ、まさに口承性の観点から捉えるならば、レッシングがローガウに取材した方言的・口承的言語性が、まずもって語彙のレベルで、少なからずレッシング自身の戯曲作品にそのまま利用されていることは示唆的だろう。すでに言及した例はもちろん、とりわけ彼の集大成的作品である『賢者ナータン』には、『ローガウ辞書』を参照しうる数々の近世シュレーゲンの表現が見られる⁵⁶。特に第3幕第7場にある „Kindes-Kindeskindern“、「子供の子供の子供」、つまり末裔という意味の言葉は、ローガウの寓意詩からそのまま採られたものである⁵⁷。

愚直なまでのこの名詩の羅列は、たしかに念を押すような表現力の強さを持ち、そして反復がおよそ効果的にはたらくところの口承言語——文字言語ではその反対に、一定の語彙の反復は原則として冗漫に見える、つまりテキストの字面として視覚的に過剰に映り出てしまう——の特徴を兼ねそなえている。同様の語彙レベルでの口承性に対するレッシングの関心は、例えば『ローガウ辞書』のなかで、文字言語としては消滅しながら、なおも市井の口承の場面では用いられつづけている語を指摘したり⁵⁸、また「不適切な時期に女をもつ、あるいは、もてあましきれないほどの女をかかえる」といったほどの意味の „uberweiben“ ——直訳すれば、「女を重ねる」——というような、極めて具象的な表現を収録したりするところにも見えている⁵⁹。

この語彙レベルでの口承言語性に基づいて、さらにもう一つ、ローガウの寓意詩を深く貫いている民衆の格言の宝庫、ことわざの宝庫としての口承言語性が重要である。オングは、「形容句、文の均衡、対照法、きまり文句的な構造、常用される題材、などの使用」を西ヨーロッパ文学の文体全般に見られる声の文化の残存物として挙げているが、なかでもことわざは、そうした表現性を顕著に残す口頭伝承の核心的な資料であり、旧約の「コヘレトの言葉」、いわゆる「伝道の書」を初期の例として、文字文化のなかを執拗に生きのびてきた⁶⁰。

ことわざの特徴は、それを生み出した社会との独特の結びつきにある。『口頭伝承論』における川田順造の言葉を借りて、ことわざ、なぞといった口頭によ

る短句型の特徴を挙げるならば、「(1)ある範囲で韻律的レベルでの反復を含み、(2)統語的レベルでの反復——平行、対比、転倒などの関係での——も、しばしば認められること、(3)言語表現として短く、(1)、(2)の性格にも助けられて、記憶、発語が容易であること、(4)比喩的表現を多用していること」⁶³が指摘される。ローガウの格言的寓意詩がこの範疇に自然に該当してくることは確かだが、川田の主張のなかで特に示唆的なのは次の点である。つまり、

ことわざではその伝えるメッセージが、共同体に認められた形で発話されることによって、ことわざのもつ規範性が有効になるといえる。内容が同じなら、どういう表現でもいいのではない。そこに、集合的知恵によって洗練された「短」句形の、韻律上の定型性は高度でないながら、「極った」言いまわしの面白さと、寓意の鮮明さの価値もあるのであろう。ことわざは、同一句内での韻律性の低さにもかかわらず、句全体としては同形反復⁶⁴が求められる言語表現の領域であるといえる。

それを育む特定の共同体こそが有意味化しうるといふ、口承的規範言語としてのことわざは、しかし近世から近代への過渡期に、例えばフランス語の影響下、つまり無数の外来語の供給源にして、かつ、文字的規範言語の手本となったフランス語の影響下において重要性を失い、自らの「反復」を続行することが困難になる。レッシングはその危機的な時点に登場したわけである。そしてローガウの寓意詩集が、ドイツ古来のことわざ、格言に満たされていること——雑多なものを含むこの詩集のなかには、そのほかに古いドイツ民謡の資料と見なしうるものさえも記録されている⁶⁵——が、レッシングに、ローガウ個人との関わりを越えて、ドイツの生きた共同体、ドイツ古来の世界そのものと向かい合うことを可能にしたのである。

ところで、レッシングの戯曲全般の特質をなす、対話・問答の緊張感、修辞学とのなほも直接的な、いわば「ラテン的な」関係に由来することが言われ⁶⁶、とりわけ「寓意詩的力学とレッシングの戯曲における対話との緊密な親近性」が指摘されている⁶⁷。もしここで、寓意詩の実作上の模範となったマルティアリスの機智の鋭さと論理的明晰さが、文字言語的な側面でのみ解されているとすれば、それは不十分なことと言わざるをえないだろう。むしろ古代修辞学とは、たとえ文字と書物の形をとることによって一つの学として確立されたにせ

よ、その根本においては、話し言葉による技術の総体だったからである。

レッシングの独特な科白には、古典古代に由来するこの機智性と並存する形で、ドイツ古来のことわざという、もう一つの様式化された口承言語性が大きく関与していると思われる。「反復」の形をとった伝承行為を求めるドイツの一共同体の口承文化を、レッシングは、啓蒙主義の世、つまり新しいドイツの言語的共同体に向けて差し出す自らの戯曲に、深く浸透させているのである。その意味で、レッシング描くところの賢者ナータンとは、ほかでもないローガウのことだったのだという言及は興味深い⁶⁸。実人生においては、17世紀シュレーゼンの宗教的混乱のなかでルター派としての信仰を終生守り抜いたにもかかわらず、その主張を万華鏡的に散乱させる寓意詩をもとにして、一種の諸宗派和解論者（Ireniker）⁶⁹的な性格と宗教的寛容性がたしかに指摘されるローガウである。数々の格言的な科白を吐き、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の対立を越えて三者の融和を目指す賢者ナータンの姿は、見事に格言詩人ローガウに重なってくる。

しかしやはり重要なのは、ローガウの宗教的ないし神学的思想内容よりむしろ、その言語性そのもの、つまり外来語の使用に関する中庸的態度とともに、ドイツ古来の口承言語を保存する宝物庫としての性格である。18世紀半ばのドイツに生きるレッシングは、彼自身の共同体の行方を見据えつつ、フランス寄りに傾いてきたこの数十年のドイツが再び立ち戻るべき出発点を、ローガウの17世紀シュレーゼンに定め置くのだった。方言との関連で、レッシングはこのシュレーゼン詩派のうちに直接の先行者を見ていることはすでに確認した。レッシングにとり決して「古い」時代の詩人ではないローガウを検証することによって、ドイツ語に、あるいはドイツの共同体そのものに残されている伝承の在庫調べをレッシングは行っている。ことわざという、様式化された口承言語がその本質として要求する社会的反復の営みは、やがて、ことわざの言語に貫かれたレッシングの戯曲作品において成就される。『ローガウ集』の編集刊行とは、いわばそのための踏み台でもあったと考えられる。

18世紀後半という、文字言語と印刷文化が内面化されてゆく時代に、その産物である書物媒体によって広範に伝播してゆく戯曲は、しかし言うまでもなく劇場での生の上演を一つの主要な用途とする、いわば口承言語と深く関係しあったジャンルでもある。文字言語と口承言語とのこうした相互関係は、レッシ

ングの戯曲作品に、どのように反映されているのだろうか。レッシングは、「戯曲のなかに、言語的にきわめて有効な形で実現されたところの、文字コミュニケーションの形態と口頭コミュニケーションの形態の機能的差異化⁷⁰」を行ったと言われる。寓意詩人ローガウをもとにレッシングが擱んだ口承言語的意識は、「寓意詩的力学」に貫かれた『賢者ナータン』という作品のなかにも、顕著に刻み込まれているはずである。

6

戯曲『賢者ナータン』のなかには、格言的な科白が再三にわたって登場する。例えばナータンがこんな「金言」⁷¹めいた科白を口にする。

Der wahre Bettler ist / Doch einzig und allein der wahre König!
(II/9, 728-729) (真の乞食とは、まずもって唯一の真なる王なのだ。)

同じ語彙、同じ統語法の反復と、簡潔な文型のなかに、「乞食」と「王」との逆説性を凝縮させた典型的な格言である。しかしこうした言葉を吐くのはナータンだけではない。アル・ハーフィには、ナータンによる先の科白の直前に次のような「粗野な教訓」⁷²がある。

Wer / Sich Knall und Fall ihm selbst zu leben, nicht / Entschließen
kann, der lebet andrer Sklav / Auf immer. (II/9, 717-721)
(自分自身のために生きることを、ドンとだしぬけに決断できない者は、永遠に他人の奴隷として生きるまでさ。)

この二つは、ともにF・シュレーゲルの有名なレッシング論に言及される科白だが、特に後者における „Knall und Fall“ という成句は、三十年戦争当時から記録がある近世的表現⁷³が活用された例である。『賢者ナータン』の科白には、格言的寓意詩に特有のものといってよい、微に入り細をうがつ分析性と、そして言辭間の緊張ないし後続の言辭による意味の反転が随所に浸透しており、それはときに純然たる対句となって現われる。はたして今のアル・ハーフィの科白も、同型のもう一つの文章がその前に付いており、この一連の箇所について、戯曲上の句またぎ(Enjambement)を解き、寓意詩風に行を整えると次のような

姿になる。

Wer überlegt, der sucht / Bewegungsgründe, nicht zu dürfen.
Wer / Sich Knall und Fall ihm selbst zu leben / Entschließen kann,
der lebet andrer Sklav / Auf immer.

(どうしようかと思案する者は、
それを禁じてもらう理由を探しているのさ。
自分自身のために生きることを、ドンとだしぬけに決断できない者は、
永遠に他人の奴隷として生きるまでさ。)

そのままローガウの寓意詩集に掲載できそうな、あるいは機智的なレッスン
グ自身の寓意詩作品として取り出せそうな一句である。この種の格言的科白は、
単体としても、また一種の対句をなすものとしても、さらにいくつもの例を挙
げることができる。⁷⁴また既存のことわざをそのまま引用したり、⁷⁵それを下敷き
にして表現した例、⁷⁶あるいは頭韻・脚韻と対句を用いた古来の格言的形式を踏
襲した例も⁷⁷ある。

レッスンの寓意詩には一種の落ち、機智の存在が不可欠であるが、この種
の科白にも事欠かない。またも托鉢修道士アル・ハーフィの科白――

Es taugt nun freilich nichts, / Wenn Fürsten Geier unter Äsern sind. /
Doch sind sie Äser unter Geiern, taugt's / Noch zehnmal weniger.

(I/3, 419-421)

(君主が、屍肉に群がる秃げ鷹どもであるなら、もちろんひどいことだ。
だがもし君主が、秃げ鷹どもに漁られる屍肉ならば、それはまた十倍もひ
どいことだ。)

この種の寓意詩的な行間の力学は、異なる二人の人物の科白にまたがって登
場することもある。

Daja: [...] Die Menschen sind nicht immer, was sie scheinen.

Tempelherr: Doch selten etwas Bessers. (I/6, 782-783)

(ダーヤ: [...] 人間は、とかく見かけのようにはいかないものです。
神殿騎士: しかしまた、見かけよりましなことも稀である。)

Nathan: [...] Nur das Gemeine / verkennt man selten.

Tempelherr: Und das Seltene vergißt man schwerlich. (II/5, 529-532)

(ナータン: [...] 低劣なものを見誤ることは、およそ稀である。

神殿騎士: そして稀にしかないものは、ようよう忘れぬものです。)

このような科白に満ちた『賢者ナータン』は、やがて一種の雄弁コンテストのごとき観を呈する。「しかしナータン殿、あなたの遣われる言葉は実に、実にたくみだ、実にすばらしい (Ihr / Setzt Eure Worte sehr - sehr gut - sehr spitz)」(II/5, 472-473) という、第2幕第5場での神殿騎士の言葉は、あたかも作品の一つのモチーフを暗示するかのようである。はたしてこの種の審査員の言明は数箇所にあたって登場する。このすぐ後には、また「まことにおっしゃるとおりです」(Sehr wohl gesagt) (II/5, 500) と言って神殿騎士は納得する。また、一種の逆説を語ったナータンに、「そのとおり (Recht)。わたしもそれを怖れているのだ。」と言う托鉢修道士 (I/3, 499)、機智の利いた修士の切り替えしに対して、「(この純朴坊主は、しかし的を得たことばかり言うものだな。)」と独語する神殿騎士 (I/5, 561-562)、さらには神殿騎士の巧みな格言の科白に、それを心の中で反芻しながら驚嘆するナータン (II/7, 600-603)、そしてまたも神殿騎士の機智溢れる言葉に、「なかなか熟した物言いだな。(Sehr reif bemerkt!)」(IV/4, 381) と称讃の声をあげるサラディンなど——気の利いた言葉を聞かされる対話相手の反応がまた、格言性を後から照射し強調する。

事柄の機微に分け入る寓意詩的分析性は、格言的な形そのものをとらずとも、科白の精神性として結実することもある。例えば第3幕第5場、つまりナータンがサラディンに初めて会見し、少々複雑な論理を展開する箇所がある。つまり「賢者」と世間で呼ばれることと、真に「賢者」であることとの違いをめぐるものであるが、サラディンはその論法に狼狽して、「そちの話しぶりは、自分が異論を唱えようとするための、その証明をしているようだ。」(III/5, 295-296) という、これもまた審査員的な感慨がもたらされるのである。そしてしばらくの後に「指輪の寓話」を聞かされるサラディンは、その寓話の説得力に、こう頭のなかで叫ぶ。「(なんと! この男が言うことは正しい。もうわたしは黙っているよりほかはない。)」(III/7, 475-476)

用いられる言葉の適切さと説得力をめぐる、いわば雄弁比べの劇、格言の応

酬の劇として『賢者ナータン』を捉えるとき、この作品を、一種の適切な名前をめぐる劇、あるいは真の名前に至る道程を描いた劇として解釈した興味深い論考に思いあたる。それはH・ビールスによるものであるが、彼はそもそも劇の登場人物について、どのように呼ばれるのか、またどんな名前をもつのか、といったことがこれほど話題にのぼる作品も少ない⁷⁸と言う。最後の大団円の場面でナータンが神殿騎士に向かって言う、「ここで貴方さまの本当のお名前を頂戴できますなら……」(V/8: 611-612: 強調は原文によるもの)というような科白は、とりわけその典型的なものの一つである。そしてビールスは、この作品の中心的構造となっている名前の機能を次のように説明する。「二人の若い主要登場人物とその見知らぬ父とが解明されざる複数の名前をもつことにおいて、明白に自己同一性を与えるべき人物名の機能がこの上なく繊細な形で阻害されている観を呈する。まさにこのことこそが戯曲の佳境を形成しているのである。そしてもっと言うなら、自分のものと信じられている名前がまったく異なる言語に属することによって、離散した家族がそれぞれ対立する宗教的共同体に組み入れられ、やがて真の名前が解明されて後に初めて、主役たちの縁戚関係が——ナータンという特記すべき例外は別として——彼ら自身にも説明のつかなかったお互いに対する好感の真の根拠として明らかにされるのである。」⁷⁹

ビールスによれば、登場人物の名前にはすべて隠された意味がある。いわばすべてが寓意的な、ドイツ語に言う「話す名前」(sprechende Namen)になっているのだが、例えばナータンという名前には、旧約聖書の預言者とボッカチオのノヴェレに登場する寛大な人物、そして同時代のクロップシュトック作品における登場人物という三つの要素の共鳴があり、さらに「賢者」という称号については、旧約の預言者としての宗教的意味合いを補強する要素と、18世紀市民社会の世俗的知恵の保持者という含意があるという。問題なのは、主役格の若い娘と神殿騎士の二つの名前である。まず娘の場合、ヘブライ語起源のレーヒャとラテン語起源のブランダとは、ともに「物柔らかな、優しい」という類似の意味をもつという事実が指摘される。さらに神殿騎士については、彼が自分の名前として挙げるドイツ名クルトと、ナータンによって最後の場面で告げられる真実の名ロイは、それぞれ「狼」(クルド語)と「獅子」(ドイツ語)を意味するのに見事に対応して、彼の父のドイツでの仮の名ヴォルフと、真の名アサートは、それぞれ「狼」(ドイツ語)と「獅子」(アラビア語)を意味するというの

である。⁸⁰『ハンブルク演劇論』第89号でレッスンは、アリストテレス『詩学』の一種の「過剰解釈」のもとに、「登場人物に付与する名前によって、詩は、その人物たちの普遍性を目指す」という自己原則を開陳している。したがって、⁸¹すべての名前を意図的に設定しているレッスンは、いわばこの隠蔽された名前の対応関係によって、後の結末における和解を「象徴的に」⁸²示すのだという。だが、このような異言語間にわたる隠された対応に気づく読者が一体いるものであろうか。

もちろんいない。いたとしてもそれは非常に限られた読者だけであるというのは、ビールス自身も承知するところである。むしろ、このような名前の使用においてレッスンは望むのは、「事実上は名前が変更させられるにもかかわらず、その名前の自己同一性と結びついた、⁸³名前の担い手の自己確信を最終的にはその権利のままに確認すること」であるという。そしてその背景には、『賢者ナータン』のなかにたしかに数度登場する根幹的理念、すなわち神の摂理の問題が控えているとビールスは述べる。つまり『人類の教育』第91番などに言われる、摂理の確かな存在とその究極的な不可知性ということ、その「⁸⁴両原則の解きたい結合においてこそ、『賢者ナータン』における名前の技巧的計算性と、その神学的・歴史哲学的内容とは符合しあうのである。」⁸⁵

摂理観の問題はもう少し後に言及するとして、その前に補足しておくべきことがある。つまり近世の口承言語に学ぶレッスンは、ビールスが示す『賢者ナータン』の登場人物たちの道程、つまり真の名前に至る道程に、口承／文字という言語の二様相の問題を巧みに絡み合わせているのである。それを以下の3つの特徴的な場面から考察してみたい。

まず第4幕第7場、かつてナータンのもとに娘レーヒャを連れてきたのは自分であったと告白する修士は、娘の血筋をめぐってナータンと思案するうち、その父が遺した聖務日課書、つまり一冊の書物入手していたことを思い出す。そこにはレーヒャの父の筆跡で、自分の家族のことが書かれているというのだが、そのことを修士は人に「話してもらって」知ったのだ。そして「わたしは字が読めません」と修士は告白し、ナータンにその文字の解説を委ねることになる。それは「アラビア語」であるというが、文字言語に通じる賢者には何の障害でもない。

次に第5幕第6場、レーヒャはシターとの対話のなかで、自らの識字能力と

書物に対する考えを明らかにする。つまり養育者ナータンの書いた文字なら少しは読めるのだが、基本的には書物を読むことはできないと言うのである。そして、むしろ書物から遠ざかることでこそ、人間の「自分らしさ」は保たれると述べ、シターの「そのようにも飾らず (schlecht)、公正で (recht)、そして作り装うところのない (unverkünstelt) お姿、自分らしさをすべてとどめ」ている人となりを誉めるのである。ここに列挙される形容詞は、すべて18世紀当時の理想的ドイツ語像をめぐる言説、とりわけ知識人の文字言語として受容されたフランス語を反面教師として展開されたドイツの言説を思わせるところがあるが、その根源的な理想的状態というものは文字によって歪曲されやすいものであるらしい。

ところでレーヒャのこうした考えは、もちろん養育者ナータンに深く影響されたものである。「わたくしの父は、死んだ記号でひたすら脳みそを押さえつける (drückt)⁸⁶、冷たい書物の学識を (Die kalte Buchgelehrsamkeit) 好まないのでございます。」そして、ただ「父の口から」のみ多くのことを学んだと話すレーヒャに対し、シターは、「たしかにそういうふうになれば、すべてのことがうまくつながり合いますね。そして全身全霊から、いちどに学びとることができますものね。」と納得をする。シター自身も、どちらかといえば書物文化からは遠い人間であることをこの後で打ち明ける。

そして大団円の第5幕第8場、神殿騎士とレーヒャが兄妹の関係であることが判明した後、サラディンはナータンに、両者の父がどこの国の人間であったかを問いただす。それに対してナータンは、ペルシア語を「話しておられた」と答えることで、大きな確信をサラディンに与えるのである。そしてさらに例の聖務日課書を手渡されるサラディンは、その書き込みの筆跡を目にし、「ああ、あの筆蹟だ！」と叫ぶことになる。

この作品の一つの核心をなす、「本当の名前」を発見するに至る道は、このように、口承言語の世界と文字言語の世界の相互の協働によって強く縁取られているのである。記憶術として、心身一体的な営みとして存在する口承言語と、時間と個人を越えた記録・保存に力を発揮する文字言語。双方は明確に区別されているのと同時に、またどちらが欠けても、この発見の過程は成就しなかった。しかしナータンは、どこに立っているのだろうか。商人として異言語を苦もなく操り、書物にはたしかに深く通じる一方で、娘に対してはそれと全く逆

行する発言をする。その手がかりは、第3幕第7場、つまりこの作品のもう一つの核心である「指輪の寓話」をサラディンに語るなかで、三つの宗教をめぐって次のようにナータンが述べた科白に探ることができる。

というのも、すべてこれらの宗教は、歴史に基づくものであるとは申せませんか。書かれたものであれ、話として伝承されてきたものであれです！

(Geschrieben oder überliefert!)——そして歴史は、おそらくただ忠誠と信仰のもとに受け入れるほかないものではありませんでしょうか。

(III/5, 459-462)

この科白を含む数行には、レッシングによる「歴史的信仰の真理性の根拠とその証明可能性に関する重要なテーゼ⁸⁷」が示されているという。そもそも歴史があるがままに受け入れられるのは、究極的には神の摂理の実現される場所として、それを捉えるからにはほかならない。啓蒙主義者という通念とは裏腹に、むしろ啓示の真理性を巧みに歴史的段階性の彼方に保存するレッシングは、神的摂理の展開を記録する手段として、人間理性に貫かれた方法を求める。そしてそこではもはや、書承と口承の区別よりも、むしろその協働が必要となることを『賢者ナータン』のこの一連の章句は示しているである。

ライマールスの遺稿をめぐる70年代の断片論争のさなか、その文書に付した『編集者の反論』で、レッシングはこう述べている。

書かれた伝統は、宗教の内的真理から説明されなければならない。そしてすべての書かれた伝統は、宗教が内的真理をもたないのであれば、宗教に内的真理を与えることはできない⁸⁸。

当時のドイツでは一、二を争う聖書——つまり書物——の収集家であったというゲツェ⁸⁹、そして18世紀の極端な正統派聖職者として、ルター聖書の字句への異様なまでの固執を見せるゲツェ。ある意味ではこの人物によく象徴されているように、時代はますます文字言語の一元的支配下に置かれていくことになる。しかしその流れを相対化しようとするレッシングは、「内的真理」と呼ばれるものによって今一度、文字の源に立ちかえることを求める。いわく、「文字⁹⁰(Buchstabe)は霊(Geist)ではない」のである。

ルター派聖職者ゲツェ以上に、ルターの真の後継者であることを自認する「神

学⁹¹の愛好者」レッシングは、「真のルター主義者は、ルター⁹²の著述にではなく、ルター⁹²の精神によりどころを求めようと欲する」と言い放つ。ここにルター⁹²の「精神」と訳されるのは、先に文字との対立において「霊」とも訳された、同じ „Geist“ という単語であるが、これをまさに神の息吹きとしての口承言語的性格のものと解することはなんら困難ではないだろう。そして、この息吹きのもとに発せられる声、神の言葉を、できうるかぎり正確に聞き取る(vernehmen)力こそが、肝心の「理性」(Vernunft)⁹³であった。

『人類の教育』第76節は言う。「啓示された真理を理性の真理へと発展させることは、もし啓示された真理が人類の役に立つべきであるとすれば、絶対的に必要なことである。」そして啓示された真理とは、例えて言えば、「算術の先生が生徒たちに、多少なりとも計算の方向づけにできるようにと、前もって言っておく計算の答え(Facit)のようなもの」だという。「もし生徒たちが前もって言われた計算の答えに満足してしまったら、彼らはいつまでたっても算術が身につかない⁹⁴」。

「指輪の寓話」を語るナータンは、サラディンに対して漠然とした到達地点を示しはするものの、そこへの具体的な道程までを教え諭すわけではない。またナータン自身が最終的な審判者の位置に立つわけでも決してない。すべては、個々の人間における、現実を理性的に見極める力に委ねられている。ビールスが照出した「本当の名前」をめぐる劇とは、神の摂理の理性的把握を求めて進む一群の人間たち——とりわけナータンという最も理性的な人物を筆頭に——の姿から、一つのあるべき社会のモデルを提示するものであるとも言えるだろう。

そしてそのなかに満ちあふれる格言の山は、そうした歴史の理性的把握を希みつつ産みおとされた、登場人物たちによる、一つ一つの言語的・理性的判断の訓練の痕跡のようにも思われるのである。歴史を織りなす現実の機微、そしてその彼方に予感される神の摂理、つまり「計算の答え」であるものを、うまく導き出すべき「算術」の練習が、『賢者ナータン』の人びとに課されている。それが格言という、口承性の強い言語の訓練であること、そして知識人レッシングが、この口承性に書承性と同等の価値を認め、『賢者ナータン』の随所にその意識を反映させていること、これは看過せざるべき事柄だろう。ドイツ民衆の口承伝統である言語的知恵によりつつ、近世の複雑な現実を切り取りつづけ

たローガウは、やはりなおもナータンの理性のなかに命脈を保っているのである。

7

最後に、レッシングからヘルダーへの流れをたどり、近世ドイツの口承伝統が近代初頭にどのような機能を担うことになったのか、そのことを確認して結びに代えることにする。レッシングからヘルダーへ——つまりこれは、ドイツ民衆の口承言語の保存者としてのレッシングから、民衆文化研究そのものの嚆矢となるヘルダー、とりわけ民謡の聴覚的・口承的世界がもつ独自の意味を問うたヘルダーへという意味である。

ヘルダーが民謡に対して深い関心を抱き、その収集にとりかかる決定的な刺激を与えたのは、ほかでもないレッシングであった⁹⁵という。一方は啓蒙主義、他方は疾風怒濤の代表格として、ある意味では実に対照的な立場に属する両者は、おそらくそうした文学史的固定観念のために、相互の影響関係などを正面きって論じられることが非常に少なかった。しかし本論で見てきたような、近世ドイツの言語文化に対するレッシングの関わり方を念頭に置く時、ヘルダーやビュルガーなどに示されている、後の疾風怒濤期の詩人たちによるドイツの民衆性の探求は、レッシングと明らかに近い場所に立っていることがわかる。自民族の言語文化のなかから、価値あるものを「救済」⁹⁶するという考え方は、直接レッシングから学び取ったものだったのであり、例えば本論が取り上げてきたレッシング／ラムラーによる『ローガウ寓意集』刊行という仕事は、若いヘルダーのすでに注目する⁹⁷ところであった。

ヘルダーの「民謡」(Volsk lied) 研究には、大きく分けて、ドイツ国民文学の模索という要素と、そしていわゆる人間性そのものの探求、つまり技巧に墮していない素朴な人間性の探求という要素とがある。

まず前者についてであるが、これはまさにレッシングの著作から、すなわち『1756・57年の野戦における、一擲弾兵の歌いしプロイセン戦争歌への序言』(1758年)から直接の動機を与えられたらしい。この著作は、いみじくも、まさにレッシングがローガウの寓意詩に携わっていたのと同じ時期のものであり、ローガウについてと同様の思索の跡が見える。すなわちこの兵士の「言語は、

当今のより大きな世界とその作家たちの言語よりも古めかしい。というのも、農夫や市民、兵士など、われわれが〈民衆〉の名で呼ぶ比較的低階層の人びとはみな、その語り(Reде)の優美さにおいて、つねに少なくとも半世紀は時代をさかのぼる。⁹⁸そしてこの兵士の歌は、古代ゲルマンの英雄歌(Barde)やその「兄弟分」としての北欧のスカルドに比すべき、「民族の営為」の稀有なる記録であるという。そして「その素朴な言語、そのドイツに由来をもつ思考様式」は、「フランスの文学がすべてであるような」人びとには理解不可能なものであるという。

ところでこの「戦争歌」は、実際には市井の一兵卒が歌ったものではなく、アナクレオン派の詩人として名を残すグライムによって、民衆的な文体の模倣のもとに創作されたものだった。ドイツ民衆の真の姿を求める作業であるはずが、すでにこの時点で一つの矛盾を露呈しているわけであり、後に民謡研究の在り方をめぐってニコライと論争になる時にも、ヘルダーにとってこれは一つの急所となるのだった。

ただしヘルダーは、そうした事実関係を重々承知のうえで、ドイツ国民文学の模索の道を突き進む。すなわち、ほかでもないレッシングが第17『最新文学書簡』のなかで象徴的に掲げたところの目的を追求するのである。レッシングはその書簡で、フランスの「洗練、優美、艶情的なもの」よりも、民族的・文化的に親縁関係にあるイギリスの「偉大、驚愕、憂鬱」——特にシェイクスピアの——を模範とし、例えばファウストのような題材を思い浮かべる。そしてヘルダーもまた同様に1773/74年の『古民謡集』で、イギリス、ドイツ、北欧という民族的親縁性をもつ地域の詩歌を集め、シェイクスピアなどは、その文字通りの詩歌だけでなく、戯曲の個々の場面を含めた形で、第2巻に独立して取り上げるほどである。

次に、ドイツという特定の民族への関心を越えた、むしろ人類そのものの理想像を思索する方向性についてであるが、レッシングは、この点では促進者の一人としての意味合いをもっている。それはまたしても彼の『最新文学書簡』、その第33信であり、そこでレッシングは数篇のリトアニアの歌に言及して、「なんという素朴な機智であろう！　そしてなんと魅惑的な単純さだろう！」と快哉の声をあげる。「天の下、いかなる場所であろうとも詩人は生まれるということ、そして生きた感情は決して文明国の特権ではないということ、それをここ

で知ることができるでしょう¹⁰⁰」。このように述べるレッシングの精神性は、ヘルダーだけでなく、さらに彼を通じてゲーテにも浸透する。「文学とは、そもそも世界と諸民族からの賜物であり、数人の洗練された教養人たちの私的遺産などではない¹⁰¹」、とゲーテがヘルダーから教えられたのは、1770年のアルザスでのことだったと『詩と真実』にある。やがてヘルダーは、様々な国ぐにの詩歌を集めた『民謡集』(1778/79年)を編み、その万華鏡的世界の彼方に「諸民族の生きたひとつの¹⁰²声」を響かせることを思い描くのだった。

レッシングからヘルダーへの影響はこのように実に深甚なものであったのだが、そのヘルダーは国民文学的性格を濃くする『古民謡集』の第3巻末尾で、民族/民衆(Volk)文学や中世文学の保存と継承に貢献したドイツ人たちの名前を挙げる。いわく「ルター、オーピッツ、クロップシュトック、クライスト、レッシング、ゲルステンベルク、ボドマー¹⁰³」と。ここで、まず最初にルターが挙げられている事実には、中世がそもそもルターにおいて終息するという歴史の見方の存在、あるいはヘルダーがルター派の牧師であったという事実を差し引いても、なお本論にとって重要なものを含んでいると思われる。

というのも、本論が取り上げてきたローガウ、レッシング、ヘルダーという文人たちは、すべてルター派の言語文化のなかに育った人びとであった。そしてレッシングとの言語的親縁性をフリーデルによって指摘された、あの近世の端緒に立つルターは、ドイツ民衆の言語使用に深く通じ、例えばことわざの資料を残しているのと同時に、まずもって、近代ドイツ語の成立に大きく関与した人物だったからである。特筆すべきは、このルターの文章語に、とりわけ「話される言語¹⁰⁴」としての独特なる性格が貫かれていたという点である。

よく言われる、近代ドイツ語の創造者としてのルターという見方には多分に過剰評価が入っているようであり、むしろ同時代にすでに進行していた言語の均整化の流れに対し、彼の聖書翻訳その他の無数の著作——彼は近世初期の大ベストセラー作家であった——と、民衆向け説教——口頭と書物の両形式において、また彼に学んだ者による説教も含めて——とによって多大なる貢献をしていったというのが正しい。ドイツ中東部の傾向を柱としつつ、ニーダーザクセン、マルク・ブランデンブルク、ヘッセンの発音と、文字言語としてのザクセン官庁語ならびにウィーン官庁語¹⁰⁵とを融合させながら、明解にして円滑に流れる超地域的言語を模索していった。16、17世紀における表現上の模範的著作

として見なされた書物の統計を見ると、ルターが深く関与したマイセン・上部ザクセン語の占める高い位置がきわめて顕著である。¹⁰⁶

グーテンベルクによる活版印刷の発明とドイツ社会の歴史的・宗教的展開との関係については、ここで贅言を費やすまでもないだろう。しかし時代の一現象として当時誕生し流布した一枚刷りのビラに言及するなら、この近世大衆メディアは、激しい宗教論争の舞台にして、かつまた民衆的・口承的ドイツ語の奔出の場となるのだった。

ルターの文体がその際に一つの模範として機能したことは言うまでもない。口承言語に対する非常に繊細な感覚を保持していたルターは、文字言語を使用するにあたって、その組織化された知識人的言語のなかへ埋没するのではなく、むしろそれを受けとめる受容者をつねに念頭に置き、口承言語的な要素を可能なかぎり取り込んで、人々にうったえかけ、理解させることを何よりも重視した。これは謙抑体の文体性としてルターがドイツにおいて完成させていくものであるが、これについてはここでは詳述しない。

ルターは、口承言語と文字言語を意識的に使い分けた。例えば同じ聖書の箇所をめぐって、口頭による説教の場合には、翻訳版とは異なる口承言語的特徴が随所に現われる。例えば規範化を受ける以前の口語的語彙を用いたり、名詞的文体を動詞的文体にくだいて話したり、または演劇的な対話性を前面に押し出したりするのである。¹⁰⁷文字の束縛を離れた、説教者ルターの面目躍如たる瞬間である。

このことは、前々章で確認したレッシングの自覚的な言語使用、すなわち彼が「戯曲のなかに、言語的にきわめて有効な形で実現されたところの、文字コミュニケーションの形態と口頭コミュニケーションの形態の機能的差異化」を行ったという指摘を思い起こさせる。レッシングは、そこにローガウ寓意詩という近世の口承言語を巧みに織りこんで蘇らせたのであり、そしてレッシングの言語研究を受容したヘルダーが、さらに古き民謡という口承世界を独自に開拓してゆく——つまりルターから、近世を経て、レッシング、ヘルダーへとつづくドイツ的口承言語の流れがここに見えてくるだろう。彼ら、近世から近代初頭にかけての各世紀の文人において、話される言葉がもちえた重要な役割がここに浮き彫りになる。紙面に固定され、文肢構造を組織化・複雑化させる文字言語は、口承言語の流れと定型的反復によって、一度解きほぐされなければ

ならなかった。そして刷新なった言語は、書物として伝播することにより再びドイツの社会に浸透していったのである。近世から近代の端緒に至るまでの、文字言語と口承言語との、緊張を含んだ相互関係は、このような系譜からその一端をかいまみせてくれるだろう。

ちなみにヘルダーの追及する民謡的口承性は、彼が『民謡集』の掉尾に置く同時代のクラウディウスの詩、あるいはその模範となったローガウと同時代の17世紀人パウル・ゲルハルトのような、いわば神秘主義的瞑想性と音楽性の語りへ、独語的な語りへと向かってゆく。口承言語と文字言語の融和の不可能を主張するようになるニコライによって、その民謡収集の仕事を揶揄されようとも、ヘルダーはなおその両者の「分裂を克服する」¹⁰⁸ことを目指し、「響き」(Ton)という、後世のドイツ抒情詩の展開にとっても意味深い概念を想定するのである。

その要素はたしかにルターにも、つまり『キリスト者の自由』の著者であり讚美歌作者であったルターにも存在したものであろう。しかしその一方で、レッシングがルターから受け取った口承言語性は、それとは別のものであったと思われる。それは言葉の受け取り手との相互性、対話性の上に成立する、明晰さと知恵を柱とした格言的口承性であった。ルターから流れ出した言葉は、近代初頭の時点で、この二つの支流に分かれていくように見える。「ヘルダーは、話すがままに書く。レッシングは、あたかも話しているかのように書く」¹⁰⁹。その論争的散文や批評文には、口承言語的な明解さと力強さが、文字言語の様式性、組織性とのあいだに不即不離の関係を築いている。このレッシングの明晰にもとづく口承性を、後世の誰が受け継いでいったのか、あるいは誰もそれを受け継ぐことができなかったのか、それはまた別の問題である。

*

もう一度、『ローガウ辞書』に帰ろう。レッシングはその末尾に、„Zungenhonig“ という一風変わったローガウの言葉を記録している。直訳すれば「舌のはちみつ」という意味だが、これに関するレッシングの解説は次のとおりである。「詩的表現。追従的で媚びを売る話、というほどの意味。寓意詩774番：舌のはちみつ、こころの毒よ」——。はちみつのごとき甘美さを漂わせてひとに話しかけながら、その一方で、心のなかに恐ろしい毒を隠しもつ、近世ドイツ

社会のおべっか使いたちを諷刺したローガウの寓意詩からの一行が、最後に引用されている。阿諛追従の言葉がもつ危険と甘さ。その相矛盾するニュアンスを、^{ツング}„Zungen“という厳しい音と^{ホーニヒ}„Honig“という柔らかな音のはざま、このあまりにも素朴に連結された二つの名詞のはざまから、強力かつ具体的に響かせている。このような言葉の簡潔さは、格言に用いるにもまた格好のものであろう。さらにここから、「はちみつ」を生み出す存在としてのみつばちを、つまり人を刺すみつばちの危険さまで含意されていると考えるのは行きすぎであろうか。

実は、この「はちみつ」と「みつばち」というモチーフにおいて、ローガウ、レッシング、ヘルダーの三人を一つの詩的圏域のなかに結び合わせることができる。そもそもこの「みつばち」自体が、古典古代の詩歌に好まれた、常套的な牧歌的点景であり、従って古典文学に通じた彼らがそれを利用して詩作したのは何ら不思議なことではないのだが、しかし三人ともにみな寓意詩の作者であったことを考慮するとき、「みつばち」は、ある特別な意味をもつにいたるのである。

レッシングは若い頃に、「みつばち」¹¹¹(1753年)という短い詩を作っている。黄金時代の牧歌的な楽園風景のなかを、愛の童神アーモルが戯れている。そしてふとした拍子に、薔薇の花のなかで眠っていたみつばちに刺されて以来、自らみつばちとなって、薔薇や堇に身を隠しては娘に一刺しを与えるべく待ち構えるようになった、という詩である。

こうした古典古代の牧歌的文学に典型的な情景は、近世の人文主義者ローガウにももちろんある。その名も「みつばちの由来」¹¹²という、50行を超える実に長いものであるが、シュレーゼン方言を数多く含むこの詩は、それをほぼ完全に残したまま、レッシング／ラムラーの『ローガウ集』にも採られたことはすでに述べた。登場するのは恋人同士のヴィーナスとアドニスである。愛の陶酔のなかで、彼らはミルテの木の木陰で口づけを交わし合っている。その口づけはやがて翼を得て、幸福な世界を飛びまわるのだが、ある時アドニスが獣の刃にかかって命を落としたのを境に、怒りと悲しみにとらわれた愛と美の女神は、飛びまわる口づけをすべてかき集め、それをみつばちとして生まれ変わらせた。そしてそれ以来、世の口づけにはすべて、甘美さだけでなく、後の苦しみ¹¹³が、つまり蜂の一刺しがつきまとうことになった、という詩である。

非常によく似た文学世界が、古典古代に学ぶこの両世紀のドイツ人に見えている。ところでレッシングは、この人を刺す「みつばち」のイメージをさらに彼の寓意詩観の裏づけに利用していくのだった。„Stachelreim“とは、直訳すれば「刺す韻文」という意味であり、すでにバロック期から機智的・風刺的な傾向をもつ寓意詩の名称であったものだが、18世紀のレッシングは、まさにその名の表題をもつ一種のメタ寓意詩を作って啓蒙主義期の寓意詩の在り方を規定するのである。それはバロック期の放縦な言語遊戯性をもはや許さぬ、ある確かな知的・道徳的認識の補助となるべき文学形式であった。

寓意詩の在り方をめぐって、ローガウ、レッシング、ヘルダーそれぞれの立場が異なることについては冒頭でふれた。そしてなかでもレッシングとヘルダー、つまり前者の機智的・批判的精神と後者における人間性への共感とは、寓意詩の両極端を成していた。実はこの食い違いを、時代的には最後に生きたヘルダーが、ほかならぬ「はちみつ」の生産者、つまり「みつばち」にまつわる寓意詩を作って総括している。レッシングに「きみ」と呼びかけつつ次のように語る、これもまた一種のメタ寓意詩である。

きみにとってエピグラムとは、忙しく立ちまわる小さなみつばち、
 花のまわりをあちこち飛んで、ブンブンいっては、ひとを刺す。
 ぼくにとってエピグラムとは、つばみ開く小さな薔薇、
 いばらの茂みに、身も心もうるおう花蜜をただよわせる。
 ぼくたちふたりは、それをひとつの庭に集めることにしよう。
 友よ、花はここです、みつばちを寄こしてください。¹¹³

ここに、レッシングに対する詩的立場の違いが表明されていることは言うまでもない。自分は人を刺す蜂ではなく、「薔薇」という花(Blume)なのだというのが冒頭から半ばまでの主張であるが、これはヘルダーが依拠するのがあくまでも『ギリシア詞華(Blumen)集』(Blumen, aus der Griechischen Anthologie)¹¹⁴であるということを示すもののものである。

しかし同時に、今は亡きレッシングにむかって「ああ、レッシングが生きていてくれたら！」¹¹⁵と叫び、彼の死後4年して出版された自らの寓意詩論の吟味を空しく請うたのもまたヘルダーである。自国の文学を再評価するという意味で、実に多くの恩恵を受けたレッシングへの尽きせぬ感謝の念がここには表現

されている。——といっても作品全体としては、人間的感情を主音調とする、実にヘルダー的な寓意詩を、皮肉にもレッシングへの返答としているのだが。ともかくも、抽象的な規範言語に視野を限定せず、例えば近世ドイツの詩人ローガウの言語を一字一句読み直すことによって、ドイツ語を「はちみつ」のごとく豊潤にしようと努めたこの先達に、ヘルダーは大いなる感謝をいただいていた。その思いだけは、「舌のはちみつ」とはおよそ別のものだったはずである。

注

レッシングからの引用は、主に Gotthold Ephraim Lessing: Werke. Hg. v. Herbert Göpfert. 8Bde. München 1970-1978 (以下 W. と略記) に拠った。また必要に応じて、ders.: Werke. Vollständige Ausgabe in 25 Teilen. Hg. v. Julius Petersen u. Waldemar v. Olshausen. 20Bde u. 5 Erg. Bde. Berlin o. J. (1925-1935). Repr.: Hildesheim 1970 (以下 P/O. と略記) を利用した。

- 1 聖書の邦訳は、以下すべて新共同訳（日本聖書協会、1996年）に依った。
- 2 Monika Fick: Lessing-Handbuch. Leben-Werk-Wirkung. Stuttgart/Weimar 2000. S. 299.
- 3 Nach: W. Bd. V. S. 888 (Anhang vom Herausgeber).
- 4 A. a. O., S. 886.
- 5 Adalbert Elschenbroich: Friedrich von Logau. In: Deutsche Dichter des 17. Jahrhunderts. Hg. v. Harald Steinhagen und Benno von Wiese. Berlin 1984. S. 208.
- 6 Wilfried Barner: Vergnügen, Erkenntnis, Kritik. Zum Epigramm und seiner Tradition in der Neuzeit. In: Gymnasium 92(1985), S. 350-371. Hier S. 362.
- 7 Gotthold Ephraim Lessing: Zerstreute Anmerkungen über das Epigramm und einige der vornehmsten Epigrammatisten. In: W. Bd. V. S. 428, 430 und 468.; Johann Gottfried Herder: Anmerkungen über das griechische Epigramm. In: ders.: Werke in zehn Bänden. Frankfurt am Main 1994. Bd. 4. S. 536.
- 8 Lessing: Anmerkungen zum Niebelungenlied. In: P/O. Bd. XIV. S. 511.
- 9 J・A・シャイベ『批評的音楽家』（ハンブルク、1737年5月14日）、角倉一郎編『バッハ叢書10 バッハ資料集』（角倉ほか訳）、白水社、1983年、227頁。
- 10 Volker Meid: Barocklyrik. Stuttgart 1986. S. 136.
- 11 Vgl. Gerhart Hoffmeister: Deutsche und europäische Barockliteratur. Stuttgart 1987. S. 186.
- 12 Richard Alewyn: Vorbarocker Klassizismus und griechische Tragödie. Analyse der >Antigone<-Übersetzung des Martin Opitz. Darmstadt 1962 (zuerst 1926).

- 13 Nach Meid, a. a. O., S. 134f.
- 14 Lessing: Gedichte von Andreas Scultetus. In: W. Bd. V. S. 530f.
- 15 Ders.: Wörterbuch. Vorbericht von der Sprache des Logau. In: W. Bd. V. S. 342.
- 16 Ders.: Briefe, antiquarischen Inhalts. 47. In: W. Bd. VI. S. 351. レッシングと語源、方言、格言との関連をめぐる以下の論述は、Albert Hirsch: Einleitung des Herausgebers. In: P/O. Bd. XIV. S. 9-16 に大きく依っている。
- 17 ヴィルヘルム・シュミット『ドイツ語の歴史 総論』（西本美彦ほか訳）、朝日出版社、2000年、256頁。
- 18 Nach: Hirsch. In: P/O., Bd. XIV. S. 13.
- 19 Nach: a. a. O., S. 13f. ちなみに『賢者ナータン』第1幕第4場では „Biedermann“ の形でも現われる。Ders.: Nathan der Weise. In: W. Bd. II. S. 224.
- 20 Lessing, P/O. Bd. VII. S. 367.
- 21 Zitiert nach: August Langen: Deutsche Sprachgeschichte vom Barock bis zur Gegenwart. In: Wolfgang Stammeler (Hg.): Deutsche Philologie im Aufriß. 2. Aufl. Bd. 1. Sp. 931-1396 (Zu Lessing: Sp. 1058-1064). S. 1062.
- 22 Ders.: Briefe, die neueste Literatur betreffend. 14. In: W. Bd. V. S. 61.
- 23 Ders.: Wörterbuch. In: P/O. Bd. XIV. S. 244.
- 24 Ders.: Wörterbuch. Vorbericht von der Sprache des Logau. In: W. Bd. V. S. 349.
- 25 Hirsch, a. a. O., S. 14.
- 26 以下は、Lessing: Friedrichs von Logau Sinngedichte. Vorrede. In: W. Bd. V. S. 337-342 による。
- 27 ゲオルク・ノイマルク Georg Neumark (1621-1681) のこと。ノイマルクは結実協会の書記をつとめていた。ここに言及されているのは、会についての一種の報告的書物 „Der Neu=Sprossende Teutsche Palmbaum“ (Nürnberg 1668. Vgl. W. Bd. V. S. 889)である。結実協会の会員はみなニックネームをもった。ちなみにローガウは「小さくする者」(Der Verkleinernde) である。
- 28 レッシングらが用いたその版は、シュレージエン生まれのイエーナ大学教授シュトレのもとで入手したものだとしている。しかし書き込みがローガウの自筆であるかどうかは疑わしいようである。自筆入り本として確認されているものはワイマールに保存されている。Walter Heuschkel: Untersuchungen über Ramlers und Lessings Bearbeitung von Sinngedichten Logaus. Jena 1901. S. 11.
- 29 W. Bd. V. S. 342.
- 30 A. a. O., S. 344.
- 31 Vgl. Joh. Nikolaus Schneider: Ins Ohr geschrieben. Lyrik als akustische Kunst zwischen 1750 und 1800. Göttingen 2004. S. 10 und 13.
- 32 Nach: Hirsch, a. a. O., S. 11.
- 33 Walter Heuschkel: Untersuchungen über Ramlers und Lessings Bearbeitung

- von Sinngedichten Logaus. Jena 1901.
- 34 P/O., S. 143. (8.87)
- 35 Heuschkel, a. a. O., S. 35 und 42. タウエンツィーン将軍の秘書としてシュレーゼンの都プレスラウに4年半のあいだ滞在し、いわば当地の文化に直接に触れることになるのは、『ローガウ集』出版後の1760年からのことだった。
- 36 W. Bd. V. S. 345. 後にふれるプロイセン擲弾兵 (Grenadier) の戦歌^{いくさうた}における類似の例が挙げられている。
- 37 Heuschkel, a. a. O., S. 42. ホイシュケルによれば、同種の表現法がヤコブ・グリムの『ドイツ伝説集』にも見られるという。
- 38 Vgl. Paul Gerhardt: Abendlied. In: ders.: Ich bin ein Gast auf Erden. Gedichte. Hg. und mit einem Nachwort von Heimo Reinitzer. Zurich 1998. S. 89f.
- 39 Heuschkel, a. a. O., S. 59-61.
- 40 例えばローガウによる造語についても „nachdrücklich“ と言っている。P/O., Bd. XIV. S. 260.
- 41 Heuschkel, a. a. O., S. 52 und 54.
- 42 A. a. O., S. 59.
- 43 W. Bd. V. S. 350.
- 44 W. Bd. II. S. 300. (IV/2:212)
- 45 Gustav Eitner: Schlußwort des Herausgebers. In: Friedrichs von Logau sämtliche Sinngedichte. Hg. v. Gustav Eitner. Tübingen 1872. Nachdr. Hildesheim/New York 1974. S. 746. Vgl. auch Theodor Verweyen: Friedrich von Logau. In: Deutsche Dichter. Bd. 2. Reformation, Renaissance und Barock. Stuttgart 1990. S. 163-173. Hier S. 171.
- 46 Ernst-Peter Wieckenberg: Nachwort. In: Friedrich von Logau: Sinngedichte. Hg. v. E-P Wieckenberg. Stuttgart 1984. S. 294f.
- 47 Heuschkel, S. 5. ただし、一年間の各祝祭日に教会で朗読されるペリコーベ (聖書日課) に合わせて、聖書章句を再話しつつ創作した60編を超える連作的作品 (Friedrichs von Logau sämtliche Sinngedichte, S. 188-199. 1, 9, 1-69) がまとめて削除されていることについて、ホイシュケルは、それらが「工場の大量生産的に」(Heuschkel, a. a. O., S. 6) 作られた文学的価値のないものだからという理由をつけている。近世独自の詩学と世界観に基づいて生まれた、いわゆる機会詩的作品への正当な評価は、まだこの当時には不可能だったのである。
- 48 W-J・オング『声の文化と文字の文化』(桜井直文ほか訳)、藤原書店、2003年、221頁。
- 49 同書、223頁。
- 50 Schneider, a. a. O., S. 21f.
- 51 フリードリヒ・グンドルフ『シェイクスピアとドイツ精神 (上巻)』(竹内敏雄

- 訳)、岩波書店、1992年、241-242頁。旧漢字は現代風に改めた。
- 52 August Langen, a. a. O., S. 1063.
- 53 エーゴン・フリーデル『近代文化史 I』(宮下啓三訳)、みすず書房、1988年、211頁。
- 54 「イリュージョン」(Illusion)は、レッシングの戯曲において、情念の喚起と演劇的効果のためにきわめて重要な前提となる概念である。Vgl. W. Bd. V. S. 859, besonders Lessing: Briefwechsel über das Trauerspiel von 1756 sowie die Hamburgische Dramaturgie, u. a. im 4. Stück.
- 55 Lessing: Briefe, die neueste Literatur betreffend. 51. Brief. In: W. Bd. 5. S. 184.
- 56 I/3:470 (filzig), I/4:517 (angehen), I/5:555 (sich erkunden), I/5:566 (frommen), I/5:577 (selb), II/2:248 (es denkt mich), III/9:693 (Bankert), V/8:565 (gach) など。Vgl. Peter von Düffel(Hg.): Erläuterungen und Dokumente. Gotthold Ephraim Lessing: Nathan der Weise. Stuttgart 1972.
- 57 W. Bd. II. S. 280 (III/7:533). Vgl. Eitner, a. a. O., S. 737.
- 58 P/O., S. 279.
- 59 A. a. O., S. 282.
- 60 ちなみにローガウの寓意詩は、これとはむしろ逆に、文字言語との緊密な関係を近世的な形で示す作品も多い。例えば図形詩として視覚にうったえる寓意詩『神の言葉』(Friedrichs von Logau sämtliche Sinngedichte, S. 166f., 1, 8, 25) や、単語を各字母に分解してその多様な組み合わせ方から作詩する『戦争なる文字』(S. 108, 1, 5, 49)、『1642年』(S. 129. 1, 6, 58)、『処罰の文字』(S. 150, 1, 7, 55)、『領主 Ludwig 置き換えて Wie Glud 様へ』(S. 390f., 2, 9, 79)、『ひとりの友人とその愛すべき名前の最初の頭文字について』(S. 618, 3, Zugabe, 58) などがある。またレッシング自身が『ローガウ辞書』で指摘していることだが、ローガウには法律用語のごとき典型的な文字言語も登場する (P/O, Bd. XIV. S. 283)。ローガウは法学部に学び、やがてはブリーク宮廷の高級官吏として一国の法律事務にも携わった。
- 61 オング、同書、238頁。
- 62 同書、42-43頁。
- 63 川田順造『口頭伝承論』(上)、平凡社、2001年、167頁。
- 64 同書、176頁。
- 65 Wolfgang Zink: Die Lindenschmidtlieder. Ein historisches Ereignis und seine Interpretationsmöglichkeiten durch das Volkslied. In: Jahrbuch für Volksliedforschung 21 (1976), S. 41-86. Hier S. 45.
- 66 Barner, 1985, S. 360.
- 67 W. Barner, Gunter Grimm, Helmuth Kiesel & Martin Kramer (Hg.): Lessing: Epoche-Werk-Wirkung. München 1998 (6. Aufl.). S. 161.
- 68 Robert M. Browning: Deutsche Lyrik des Barock 1618-1723. Autorisierte

- deutsche Ausgabe, besorgt von Gerhart Teuscher. Stuttgart 1971. S. 42.
- 69 Wieckenberg, a. a. O., S. 310.
- 70 Gotthard Lerchner: Zu Lessings Stellung in der sprachgeschichtlichen Entwicklung des 18. Jahrhunderts. In: Zeitschrift für Phonetik, Sprachwissenschaft und Kommunikationsforschung 33 (1980). S. 345-352. Hier S. 351.
- 71 Friedrich Schlegel: Über Lessing. Nach: Düffel, a. a. O., S. 132.
- 72 Ebd.
- 73 A. a. O., S. 28. 第2幕第5場 (W. Bd. II. S. 251, II/5: 431f.) にも同種の表現がある。
- 74 対句の形式や同語反復などを含む以下の箇所を、格言的言説の一例として参照のこと。I/1:33-36, I/2:293-296, I/2:361-364, I/3:461-2, I/3:691-695, I/6:686-687, I/6:777-778, II/1:12-13, II/1:55, II/1:81, II/1:100-101, II/1:124-125, II/5:496-499, II/5:523-524, II/9:699-702, III/1:91-93, III/4:230-231, III/4:257-258, III/6:350-351, III/8:634-635, IV/1:71-72, IV/2:99-101, IV/2:162-165, IV/3:260-261, IV/4:379-380, IV/4:382-383, IV/7:622-624, IV/7:690-692, V/7:516-517, V/7:527-528.
- 75 W. Bd. II. S. 220, I/3:408.
- 76 A. a. O., S. 304, IV/4:315-316.
- 77 A. a. O., S. 276, III/7:383.
- 78 Hendrik Birus: Poetische Namengebung. Zur Bedeutung der Namen in Lessings Nathan der Weise. Göttingen 1978. S. 90. ビールスによれば計60箇所にのぼり、これはレッシングのほかの戯曲やクライストの作品の倍以上の数字になる。
- 79 Ders.: Das Rätsel der Namen in Lessings Nathan der Weise. (1977) In: Klaus Bohnen (Hg.): Lessings Nathan der Weise. (Wege der Forschung Bd. 587) Darmstadt 1984. S. 290-327. Hier S. 296f. この論文の内容を、より広い文脈のもとに詳述したものが前註に挙げた同じビールスの著書である。
- 80 Vgl. a. a. O., S. 324-327.
- 81 Lessing: Hamburgische Dramaturgie. 89. Stück. In: W. Bd. IV. S. 643.
- 82 Birus, a. a. O., S. 310.
- 83 S. 314.
- 84 「永遠なる摂理よ、汝の見きわめ難い歩みを歩むがいい！ ただこのように見きわめ難いからといって、わたしが汝に絶望することだけはないようにして欲しい。——たとえ汝の歩みがわたしには後戻りしているように思われようとも、わたしが汝に絶望することのないようにして欲しい！ 最短の線がつねに直線だということは真実ではない。」——Lessing: Die Erziehung des Menschengeschlechts. In: W. Bd. VIII. S. 509. 邦訳は、レッシング『人類の教育』(安酸敏眞訳)、安酸敏眞『レッシングとドイツ啓蒙』、創文社、1998年、351頁による。
- 85 Birus, a. a. O., S. 323f.

- 86 「押さえつける (drückt)」という動詞は、「(書物・文字を) 印刷する (druckt)」という動詞にも共鳴するだろう。
- 87 安酸敏眞『レッシングとドイツ啓蒙』、182頁。
- 88 Lessing: Gegensätze des Herausgebers. In: W. Bd. VII. S. 458f. 邦訳は安酸、同書、52頁による。
- 89 安酸、同書、127頁参照。
- 90 Lessing: Gegensätze des Herausgebers. In: W. Bd. VII. S. 458.
- 91 Lessing: Axiomata. In: W. Bd. 8, S. 130.
- 92 Lessing: Anti-Goeze I. In: W. Bd. 8, S. 162.
- 93 安酸、同書、197頁参照。
- 94 Lessing: Die Erziehung des Menschengeschlechts. In: W. Bd. VIII. S. 506. 邦訳は、安酸、同書、347頁による。
- 95 Ulrich Gaier: Volkslieder (Kommentar vom Herausgeber). In: Herder: Werke in zehn Bänden. Bd. 1. S. 852. 両者の影響関係に関する以下の論述はこの解説文に依るところが大きい。
- 96 A. a. O., S. 1265.
- 97 Herder: Über die neuere deutsche Literatur. Fragment 6. In: a. a. O., S. 192.
- 98 Lessing: Preußische Krieglieder in den Feldzügen 1756 und 1757, von einem Grenadier. Vorbericht. In: W. Bd. V. S. 16.
- 99 ders.: Briefe, die neueste Litaratur betreffend. 17. Brief. In: W. Bd. V. S. 7073. Hier S. 71ff.
- 100 ders.: Briefe, die neueste Litaratur betreffend. 33. Brief. In: a. a. O., S. 106.
- 101 Johann Wolfgang von Goethe: Dichtung und Wahrheit. X. In: Hamburger Ausgabe. Bd. 9. S. 408f.
- 102 Nach: Gaier, S. 852. ヘルダーの死後、妹と友人がヘルダーのために出版した際の民謡集のタイトルは、彼らによって「諸民族の声」——「声」は複数形——とされ、多種多様なものの集積という性格を越え出ることのないこの名前は、ヘルダーの意図した人類そのものの「ひとつの」声という、一種の統合の夢をそこに響かせるべくもなかった。
- 103 Herder: Alte Volkslieder. 3. Buch. In: ders.: a. a. O., S. 58.
- 104 Werner König: dtv-Atlas. Deutsche Sprache. München 1998. S. 97.
- 105 ローガウのいた17世紀シュレージエンはウィーン宮廷の支配下にあり、彼の勤務していたブリークの地方宮廷でも、公用語として用いられたのはこのウィーン官庁語だった。レッシングの『ローガウ辞書』には、ローガウの詩に残存するその一例さえも「シュレージエン語ではないが」という注記とともに記録されている。S. 264.
- 106 König, a. a. O., S. 101.
- 107 Hans Moser: Rezension von W. Schenker: Die Sprache Huldrych Zwinglis im

- Kontrast zur Sprache Martin Luthers. Berlin/New York 1977. In: ZDL 49 (1982). S. 397-405. Hier S. 400.
- 108 Schneider, a. a. O., S. 44.
- 109 Bruno Markwardt: Geschichte der deutschen Poetik. Bd. III. Berlin 1937. S. 152.
- 110 Logau: Heuchler. In: Friedrichs von Logau sämtliche Sinngedichte, S. 178. 1, 8, 74.
- 111 Lessing: Die Biene. In: W. Bd. I. S. 89.
- 112 Logau: Ursprung der Bienen. In: Friedrichs von Logau sämtliche Sinngedichte, S. 528ff. 3, 6, 10
- 113 Herder: Zwo Gattungen des Epigramms. In: Werke in zehn Bänden. Bd. 1. S. 770.
- 114 ヘルダーが用いる『ギリシア詞華集』のドイツ語表題。Vgl. Werke in zehn Bänden. Bd. 1. S. 761. ちなみに若きレッシングの前掲の詩「みつばち」は、『ギリシア詞華集』の濃厚な影響下に生まれたものである。Vgl. W. Bd. II. S. 604. (Erläuterungen zu Band I)
- 115 Herder: Anmerkungen über das griechische Epigramm. In: Werke in zehn Bänden. Bd. 4. S. 520.